

第二章 低迷

一 無風【平成九年度】

平成八年八月。風軍団が富士の裾野に旋風を起こして去ったあとの鶴鳴はまた無風状態になった。平成九年度から十一年度まではこのメンバーで戦わなければならない。

三年生 副田（桜が原） 斉藤（七次台） 三島（愛宕） 渡辺（日宇） 松下（小ヶ倉）

二年生 森崎（江平） 井澤（愛宕） 佐仲（国見） 下田（滑石）

一年生 高橋（一宮） 三城（一宮） 松田（七次台） 飯笹（梅香崎） 田中（土井首） 本田（マリア）

浜崎（大浦） 松本（鷹島） 宮原（愛宕） 山口（三川） 梶原（西有家）

平成九年度は副田が生き残るが、そのあとの二年間で、磨けば風軍団の誰かに匹敵するようになるかもしれないという選手はこの段階では見当たらない。特にメンタル面においては…。

平成八年一〇月 地区新人戦 優勝 スタメン副田 三島 井澤 森崎 下田

【案内文書】

紛失

【結果報告】

ご覧のようにスタメン五人以外は使っていません。それは、スタメン以外の選手が使いものにならないからではありません。新チームにとって初めての公式戦だったからです。新チームの主力選手は副田以外主戦力として戦った経験のない者ばかりで、しかも五分か一〇分しか試合に出したことの無い選手ばかりです。本当の力というのは四〇分間通して何が出来たかで計られるものです。五分や一〇分では本当の力はわかりません。

でも、最初の公式戦だったからそうする必要があったのであって、一ヶ月後に行われる県新人戦ではこんなことはしません。少しでも多くの選手に試合を経験させるようにします。新チームの初めての公式戦。下級生を気遣いながらの副田のプレイはさっぱりでした。が、インターハイや国体では味わったことのない苦しさを体験できて、おそらく彼女は精神面で大きく成長したでしょう。初めて主役を演じた井澤・森崎・下田も、パニックに陥りそうになったり放心状態になりかかったりしながら何とか自分をコントロールして三試合を戦い抜きました。これもまたとても大きく大きな財産になったはずです。三年生が退いたあとのチームは極端に力が落ちると思っていたので私は正直言ってホッと思いました。副田も同じ気持ちだと思います。これは、年末のウィンターカップに向けて非常に重要なことです。

【非公開のボックススコア用コメント】

ごくろうさま。シド（副田）ホッとしただろう。とにかく、新チームで初めての公式戦というのは大変だ。でもよく乗り切った。ハナマルあげるよ。

【副田裕子】

副田と、平成二三年度の末っ子軍団の山下とを比較した人物評を第一章で述べたが、副田が山下に勝るのは外角のシュート力だけである。身長も一五九センチしかなく足が速いわけでもなかった。あとでわかったことだが、なぜ彼女は外角のシュートが得意だったかという点、彼女が小さい頃からずっと和太鼓をやっていたからだ。和太鼓をやっていたから腕っ節が強く、シュートがぶれないのだ。副田のシュートの安定性だけは山下が逆立ちしてもかなわない。しかし、彼女が平成二三年度の末っ子軍団に入ってプレイしても山下ほどに活躍はできないだろうと思う。

風軍団では、先輩四人が副田の長所を引き出したから副田のスリーポイントシュートが生きたのであり、

新チームになって中間管理職としての職務まで背負わされると彼女の持ち味であるシュート力は充分発揮できない。

加えて彼女は、この大会で半月板を損傷してしまった。十一月四日に手術して一〇日後に退院したが、地区新人戦の一ヶ月後に行われた県新人戦には出場していない。彼女の手術は、十二月末のウィンターカップに間に合わせようと思って早めたのであるが結局間に合わなかった。なかなか痛みが取れないし、少し練習すると膝に水が溜まる。それがなかなか改善されなかったからである。

副田に変わってウィンターカップでは一学年下の井澤がスタメンで出場したが、その井澤はすべてのプレイをそつなくやるが、それも前述の先輩四人がうまく使ってくれるから機能したのであり、まだ自らがチームメイトを引っ張って動かせるほどのものではない。だから、ウィンターカップの生き残りが二人居るとはいえ、平成九年度のチームはどんぐりの背比べになってしまった。

平成八年十一月十八日 県新人戦 二位 スタメン 三島 渡辺 井澤 森崎 下田

【案内文書】

紛失

【結果報告】

地区新人戦から県新人戦まで約一ヶ月しかありません。しかし、そのわずか一ヶ月の間に各チームともがらりと変わります。地区新人戦では初めての公式戦であがってしまってもできなかった選手たちも、一度公式戦を経験すると落ち着きが出てきてそれぞれの持ち味を発揮して試合ができるようになるのです。

さて鶴鳴は？

まったく逆でした。終始落ち着きがありません。まずいプレイをした時だけでなく、ナイスプレイをしても顔はひきつっています。練習ではすすいできるプレイでも慎重過ぎるくらい相手を確認してからやるので振り切れません。普段は思い切り通すパスも考えすぎるから遅れます。

原因は副田でしょう。若い選手というのは頼りになる柱がコート上に居なければこんなになってしまうのです。私から見れば、副田とて判断力とか決断力という点では今回試合に出た選手たちと五十歩百歩なのですが、選手たちにとってはそうではないのでしょうか。

優勝できなかったことは気になりませんが、残りの選手たちを成長させるチャンスを見逃したことを私はとても残念に思います。今後の試合で優勝することがあったとしてもそこには「副田が復帰したから」とか「新入生が入ってきたから」という理由がくっつきます。今回主力で戦った選手にとってはそれは屈辱でしょう。今回の試合は「留守部隊を自分たちの手で守ったぞ」という自負心を持たせるのに絶好のチャンスだったし、副田抜きでの練習の仕上がり具合も、大会に入ってから他のチームとの比較からしても充分勝てる力があつただけに残念でなりません。

【ボックススコアコメント】

コートの中の自分、試合の様相、それを何度も何度もイメージしてみる。何が見えるか？踏ん張った自分が落ち着いている自分？パニックっている自分？情けない自分？どれが多い？

平成九年一月 九州春季選手権二次予選 三位 スタメン副田 三島 井澤 森崎 下田

【案内文書】

紛失

【結果報告】

一〇月の地区新人戦…圧勝

十一月の県新人戦：惜敗で二位

今回の九州春季二次予選：無惨は敗北

これが新チームの戦績です。同じメンバーです。だんだん弱くなっています。原因のひとつは副田の手術です。それに今回は森崎の風邪が加わりました。今回森崎は前日まで休んでいて試合当日会場で顔を合わせました。

私が言いたいのは、そのようにコンディションが悪かったからこのような結果になったということではありません。今年は突出したチームがないので少々アクシデントが起きても優勝できるんです。言いたいことは、アクシデントが一人ひとりの不安を増幅させていったということです。希望や勇気が引っ込み、不安が身体中を覆った人間は行動を起こそうとしません。建設的なアドバイスも批判や中傷にしか聞こえません。

人間力：そう人間力なのです。これを磨かなければなりません。人間力のある人は窮地に立たされても冷静さ・勇気・決断力をなくしません。そしてわずかな活路を見つけて脱出を試みます。それを見事に実践してくれたのが櫻田や工藤たちのチームだったと思います。彼女たちも最初から人間力があつたわけではありません。日常の訓練においてお互いの思いやりや勇気を感じながら成長していったのです。今年のチームも、何か安心材料が一つでも提供されては一気に前進するでしょうが、提供されるのではなく自ら行動を起こして人間力を高める努力を積み重ねることの方が大切でしょう。

【置き去り】

一〇月の地区新人戦も、十一月の県新人戦も、十二月下旬に行われる上級生主体のウィンターカップと平行練習期間中に行われた試合である。年が明けて行われる九州春季大会二次予選も三年生が練習を手伝ってくれていて、練習環境は地区新人戦や県新人戦と何も変わりはないのだが、心情的には「もう三年生は居なくて私たちだけでやっていかなければならなかったのだ」となる。

前年末、膝の故障で二大会連続欠場した新主将の副田が復帰したにもかかわらず、地区新人や県新人と比べて試合の出来が悪かったのは、おそらく副田が大きく絡んでいると思う。復帰した副田自身には「いよいよ私が引っ張っていかなければならない」と、風軍団から置き去りにされた不安の方が大きくのしかかっていたに違いない。それが以心伝心、他の選手達に広がっていったのだと思う。

平成九年四月 県下春季選手権 優勝 スタメン副田 井澤 森崎 高橋 三城

【案内文書】

三月上旬、副田の膝に少し水が溜まりました。主治医の診察では半月板の再断裂か関節軟骨傷害の疑いがあると診断されました。そして、もう一度関節鏡を入れなければ正確な診断はつかないと言われました。私はその検査を六月上旬にしてもらうことにしました。六月三日は県高校総体の最終日です。インターハイの出場権をかけたこの日に副田がコートに居なければ勝てないからです。そのために、春休み遠征も帰崎後の強化練習も、副田は他の選手の半分もやらせていません。

変わりに鍛えられているのが森崎・井澤・高橋・三城・松田・本田の六人です。森崎・井澤は二年生ですが、精神面では一年生並にたまたきなおされています。新入生はまだ入学式前なのに追い込まれてパニックに陥り心身ともにボロボロです。今日（四月三日）、山崎語録第選手の部 六三「自分の愚かさに気がついた時、成長の第一歩が始まる」の意味を新入生に説明してやりました。

選手が苦しんでいて「もうだめだ…」と思った時に助けてやれるのは世界中探しても俺しかいないと私は思っています。追い込まれる方も苦しいでしょうが追い込む方も辛いものです。でも私は妥協しません。今が私にとって一年中で最も苦しい季節ですが、インターハイの頃にはこの六人を目の奥の輝きが違う人間に仕立て上げるつもりでこれから半年闘い続けます。

【結果報告】

四月三日付けの案内文書の文面がご記憶に残っておられるでしょうか？ 選手が「もうだめだ」と思った時に助けてやれるのは世界中で私ひとりしかいないと思っっている。追い込まれる方も苦しいだろうが追い込む方も辛いものだ。というような内容でした。私はこの春季選手権に向けて必死だったのです。

昨年度末、副田の膝の故障で柱を失ったクレインズはガタガタになってしまいました。勝たなければならぬ宿命を背負わされた重圧と、チームの先行きに対する不安で押しつぶされそうになり、主力選手がふたり「辞めたい」と申し出てきました。それが二月中旬のことです。そんなチームを「私たちは大丈夫なんだ」と思わせなければなりません。それには新入生が加わったニュー・クレインズとしての最初の公式戦である春季戦で勝つことが絶対なのです。

三月十六日から、本田・高橋・三城・松田の新入生四人が練習に参加してくれました。この日から春季選手権まで約一ヶ月。この期間で「大丈夫なんだ」という気持ちチームに根付くようにしなければなりません。私は久しぶりに鬼になりました。

淡い夢を抱いて春休みから練習に参加してくれた四人の新入生は、初日から「何を間抜けげらしてやってるんだあ！」と怒鳴りつけられます。まだ入学前なのに、もうすでに一年前から鶴鳴でバスケットをしている選手並みに扱われるのです。四月上旬、新入生はすでにパニック状態です。でも、新入生はほんとうによく耐えてくれました。身も心もボロボロになりながら練習し、しかも高橋と三城は入学して一ヶ月も経たないのに全試合フル出場です。新入生をいじめたのは私ですが、いじめの張本人の私がこの四人に対してはほんとうにかわいそうだと思います。

でも耐えてくれたといっても新入生は入学してまだ一ヶ月も経っていません。高橋も三城も決勝戦の後半は遂に何もできなくなりました。でもここで、それまでふがないプレイばかりしてきた上級生たちが、高橋と三城の息継ぎで出場した間によく粘り、勝利に貢献したのです。私はこの試合で上級生に確実に自覚が芽生えたと思っています。

平成九年五月 岡山遠征 練習試合九試合 六勝三敗

【合宿報告】

三月十六日に新生クレインズとしてスタートし、三月下旬のひまわり杯、四月中旬の県下春季選手権と確実に力は付いています。しかし、力がついてきたとはいえ、初日の福井商業戦、二日目の紫野高校戦と城北戦が今のクレインズの現状を物語っています。いずれも、最初は有利に試合を進めながら中盤あるいは土壇場で捕まえられて勝ちを持って行かれました。

特に紫野戦では前半同点で終了しながら後半開始八分間ノーゴールという有様。発端はこちらのナイスプレイがごとごとくシュートミスになったことでした。確かに、有利に展開できるはずのプレイが逆に借金となって返ってきたのだから損したことはないかもしれませんがそれで試合の勝敗が決定してしまっただけではありません。でも選手たちは動揺しました。その動揺が尾を引き、次々と伝染して八分間ノーゴールという結果になったのです。

これは、今起きた事が重大事件なのか大したことではないのか、簡単に挽回できるものなのか挽回不可能なのか、というようなことを一人ひとりがわかっていないから起こることです。原因はキャリア不足です。では、このような事を解決するには対外試合をたくさん経験させればよいかというとそうではありません。これはプレイヤーとしてのキャリア不足が原因なのではなく人間としてのキャリア不足が原因だから練習試合をいくら積み重ねても解決できないのです。

人間としてのキャリアとは年齢を重ねることなのかというところではありません。注意深く周囲を観察し、

その中から「なるほど」をたくさん見つけ、その体験を多く重ねることが人間としてのキャリアになるのです。この遠征で選手を指導した事例を二つ紹介しましょう。

前の試合が終わって自分たちの試合のアップをしようとした時、私は「ストップ」と言って選手を集めました。前の試合のチームのマネージャーがコートの端でビデオカメラを回しています。試合は終わったのですが挨拶を終えて選手がベンチに戻ってくるまでを撮影しているのです。それとは知らずに鶴鳴の選手がその直前を横切ってしまった。気配りが足りなかったのです。集めた選手たちに私は「試合が終われば普通は撮影も終了だ。でもあのマネージャーは撮影を終えようとしなかった。だから今のはちよつと様子を見るべきだったなあ」と言いました。

私たちは岡山東商業の合宿所に泊ってもらいました。〇選手が「先生、体育教官室からおじさんがコーヒ―を差し入れてくれました」と言って、監督室にいた私のところにコーヒ―を持ってきました。昨年まで岡山県高体連の専門委員長をなさっていた岡山東商業の古川先生が私のコーヒ―好きを知っていてわざわざ豆から挽いてコーヒ―をたてて差し入れてくれたのです。

「おじさん？ あの人はこの先生で、今回の合宿の世話をしてくれる責任者なんだ。おじさんじゃないよ。知らないところへ来たらねえ、周囲の人の立ち働く様子や俺とのやりとりの態度なんかをよく見て、地元の選手に『あのひとダレ？』とか聞いて失礼のない対応が出来るように勉強しておくもんだ。そういうことに気が付くかどうかも実力のうちなんだぞ」と指導しました。

昔は自分のチームのボロが出ないように、「あの先生がこの責任者だからしっかり挨拶しておけ」とか「最後は部屋の掃除だけじゃなく、トイレもちゃんと掃除して帰るんだぞ」などと、前もって指導していました。しかしそれでは選手の注意力や気配りはいつまで経っても身についてきません。生きた教材を使ってタイミングよく指導しなければ体験としては積み重ねられないのです。根気と時間がかかります。

平成九年六月 県高校総体 優勝 スタメン 副田 三島 井澤 森崎 下田

【案内文書】

三月十六日から新生クレインズの練習が始まり、三月下旬の関東遠征、四月中旬の県下春季選手権、五月の連休の岡山遠征と、強化試合や公式戦を積み重ねてきました。息つく暇もない二ヶ月でした。

この二ヶ月やつきになって取り組んできたのは「こども」を「おとな」にする訓練です。身体を鍛えるとか技術を教えるとか、そんなことはずっと先のこと。自分がいかに鈍感で気が利かないとか、他人の苦しみや喜びに対して自分がいかに無関心であるとか、そんなことを気付かせることばかりに気を配ってきました。

今、そんなことを毛ほどもわかっていなかった選手たちがわかりかけてはきました。でも、わかったからできるというような簡単なものではありません。わかったことができるよになるまでにはまた時間がかかります。

今度の高校総体は、このように人間としての未熟さを教育しながら完成された人間が立つべき檜舞台に選手を立てなければなりません。ギリギリまで追いつき込みますが本番では否定は禁物。現段階でのそれぞれの長所が存分に発揮されるよう綿密な計画を立て、ちよつとしたことばにも気を使い、交替やタイムアウトのタイミングも寸分の狂いがないように神経を使って戦いを乗り切ります。三〇年前に戻った気分です。

【結果報告】

四月三日付けの文書以来、昨年十一月以降の新チーム育成の経過をずっと報告し続けてきました。そのポイントは、選手の人間的な未熟さをいかにして引き上げるかでした。結論として、それが達成されないまま

決勝の日を迎えてしまったことを報告しなければなりません。

試合を観られた方の中で、後半のクレインズの棒立ちプレイから「鶴鳴は体力がないよ。後半棒立ちだったもの」と、勝敗の分岐点を体力に置かれた方は多いと思います。もちろんそれは間違いではありません。しかし私は、それより「わかる」ということが先だと思ってこれまで指導してきました。人間の力、それはたとえグリコーゲンが枯渇していても本人が「まだ大丈夫」とわかっているれば力が出るものだし、客観的にまだ大丈夫だという場面でも、本人が「もうだめだ」と思っていればグリコーゲンが残っていても力は出てこないものだと思います。

戦いというものは一方的にこちらの都合のいいようにはいきません。山もあれば谷もあるのが戦いです。確かに、クレインズにも谷はありましたが今日の決勝戦はクレインズ不利という流れではなかったと思います。しかも、この一本が決まれば試合の流れは一気にクレインズに傾くというプレイが何度あったでしょう。それも難しいプレイではなく、普段平気で成功させるプレイばかりです。それをことごとく失敗しました。それは「しめた」とか「これで今日の試合はいただき！」と思って臨めばいいものを「大丈夫かなあ」とか「これを決めなければ」といつような不安とか緊張の下でプレイしていたからだと思います。言い換えれば、現状がわかっていなかったからだと思います。

もちろん私は、試合の流れや相手選手の心理まで含めて、タイムアウトの時に充分わかりやすく解説はしました。選手はうなずきます。でも、本当にわかってうなずいているのかどうかは選手の目を見ればわかります。目が泳いでいました。

アイコンタクトということがありますが、これは目配せただけでわかるという意味で使われます。今の選手たちの中でアイコンタクトで通じる選手は一人もいません。私と目が合った選手は、何を指摘されるのかという思いでおどしています。私が恐ろしいからでしょうか？確かに、春季選手権大会の報告で「久しぶりに鬼になりました」と述べましたが、それとて二〇年前の選手に言わせれば「優しくなりましたねえ」と言われるほどの鬼ですから大した鬼ではないと思っっているのですが、私が恐ろしいからおどしているのであれば指導方法を見直さなければなりません。

指導方法についてはもう一度考え直すとしても、日常の行動（練習とは限りません。生活全般の行動すべてを含みます）において、現状を理解する力を養い、自らが判定を下して次の行動を決めるという体験を数多く積み重ねなければならぬことは間違いのない事実です。

【ボックススコアコメント】

後半十二分過ぎのドラウトの原因は何だろう？よく考えてみよう。ウィンターカップ予選ではおなじことを繰り返したくないね。

平成九年六月 九州高校総体 一回戦敗退 スタメン 副田 井澤 森崎 高橋 三城

【案内文書】

県高校総体で負けた直後、私は一人で学校に戻ってグラウンドを四〇周走りました。だから気力も体力もまだまだ底をつけていません。でも、負けたショックはなかなか抜けません。むしろ、日に日に強くなっていきます。執念深い性格だからでしょうか。「気持ち切り替えて頑張ろう」というような明るい気分にはどうしてもなれないのです。心の奥底では怒りと復讐心がぶすぶすと燃え続けています。

復讐の意味は、相手チームへの復讐ではなく敗北への復讐であって選手への報復という意味でもありません。報告でも述べたとおり、練習の主体はあくまで「わからせる」ことで、しごきはいたしません。正当な練習で力をつけて、来るウィンターカップ予選に復讐を果たしたいと思っ取り組んでいます。

そのためには、九州大会の戦いぶりがとても重要です。高校総体終了後の最初の練習で、私は冒頭に「九

九州大会では観ている人たちに『次はまちががなく鶴鳴が勝つよ』と言わしめる試合をするのが当面の目標だぞ』と言いました。そのためには、際どい場面を凌ぎきる力を少しでも向上させて臨むしかありません。

【結果報告】

県高校総体で負けてからずっと不愉快な気分が抜けませんでした。現地に着いてからもそれは抜けません。こんな時はそれをさらに増幅させるような出来事がよく起こるもの。開会式前の現地練習でも私の神経を逆撫でするような出来事が起こってしまいました。私は超不機嫌です。

開会式前の練習は各チーム一時間なのでサーッと流して終わりましたが、私はいつまで経っても腹の虫がおさまりません。で、翌朝私はK高校のN先生にお願いして会場を借り、練習をさせて貰いました。練習というより練習という名を借りたしごきです。いきなりコートラン十五分。一〇分を過ぎた頃S選手がアゴを挙げ、苦しそうな表情で次第に遅れ始めます。私はコートの中にずっと行ってS選手を引きずり倒し「きさま！ その顔でこれから試合をやるのか！」と怒鳴りつけました。試合前の練習としては少しハードだったかもしれませんが、そんなことを冷静に考えられる心理状態ではありませんでした。

試合は大差で負けましたが、終わった時の私から怒りは消え去り「ヨシ、次はもうござ」という気持ちになっっていました。たぶん、自分の中で鬱積した怒りを爆発させることができたからだと思います。敗北には変わりませんが、県高校総体の後の気分と今とは全然違います。相変わらず幼稚で理解度もスタミナもまだまだ不十分ですが、県高校総体のあとは選手のネガティブな一面しか見ていなかったのに九州大会のあとは選手のポジティブな一面に目を向ける自分に変わりました。

日曜日、鹿児島を発って夕方長崎に着いた後、すぐグラウンドで五千メートルのペース走をやりました。これから始まるグラウンドインターバルのデモンストレーションです。しばらく練習の主体をスタミナとパワーに置きます。ただし、たたきあげるとかしごくという気持ちではやりません。段階を追ってやります。

【非公開のボックススコア用コメント】

後半滑り出しの三連続ターンオーバーと八分間のドラウトが痛かった。でも、県総体ほどのショックはないよ。夏はスタミナをつけよう。

【報復手段】

後年、この時の私はチームを強くするためにどうするかということよりも、選手の中からだれを生け贄にするかということだけしか考えていなかったのだと思った。山崎語録のコーチ心得実践編の十六に「練習を報復手段に使うな」と私は書いている。山崎語録を世に出したのは平成十一年四月一日である。しかしそれは、平成十一年に突然そう思ったのではなく、長年の反省に基づいて書いたことをまとめたものだから、ここに登場する副田たちの時にはもうそんなことは私の指導理念の中に登場しているはずである。選手には偉そうなことを言いながらまだ、わかってはいるけど実行できない愚かな自分自身だったのだ。山崎純男五〇歳の年である。

平成九年八月 九州国体 予選敗退 純心六・鶴鳴六 スタメン浜本(純)原(純)重松(純)副田(鶴)森崎(鶴)

【案内文書】

まず戦力分析をしてみます。

六月の九州大会の優勝は北中城、二位中村学園、三位が小林と佐賀清和です。それから判断すれば沖縄が優勝候補で次が福岡ということになります。が、国体となれば層の厚さで福岡が優位、次いで沖縄、あとは混戦と私は見えています。

さて、我が長崎は福岡のブロックに入りました。今年の長崎は昨年よりさらに小柄で、大型選手を揃えた福岡にはほとんどミスマッチ。それでも勝つためにはインサイド勝負ではなくアウトサイドの選手で優位に

立つという試合展開を考えなければなりません。最初は、純心・鶴鳴のツープラトンの人海戦術でいこうかなと思いましたが、夏休みの遠征ではやはり両チームとも一年生のディフェンスに難があり、終始ツープラトんでいくには危険性があることが判明しました。それで、主戦力は混成で戦いたいと考えています。ただ、残念なのはチームで一番のファイターでリーダーである中嶋(純心主将)が、九州国体直前の遠征で手の甲を骨折したことです。中嶋の気持ちと思うと不憫でなりません、それを戦いのエネルギーに換えて精一杯戦ってきます。

【結果報告】

「相手は出来過ぎだ。これが一試合中続くとはいわない。辛抱して粘っていけば十二丁三点ぐらいの差なら追いつけるよ」と、福岡戦の二回目のタイムアウトの時に私は言いました。

戦う前に私はディフェンスをゾーン主体でいくということを選択には告げていました。マンツーマンでは結局ミスマッチを突かれて点を取られ、善戦はしても絶対勝てないと思っていたからです。そのゾーンも、ハイポストへの中継パスを封じる手だてを選手が理解するのに時間がかかり、ボールを後追いつけるかたちのディフェンスになって外角シュートを次々決められました。

でも私は絶対チャンスは来ると思っていましたし、選手にもそれは言い続けました。開幕前の予想と違って今年の福岡はそれほど破壊力がないと判断したからです。そしてチャンスは後半にやってきました。選手たちがハイポストへのパスの中継とハイポストの選手を潰す要領をわかってきたからです。

差は少しずつ縮まり、中盤過ぎに十一点差まで詰め寄りました。このような試合は一桁の点差まで漕ぎ着ければ捕まえたも同然です。あとひと息。でも決定打が出ません。それと、コート上の選手にも「さあ捕まえたぞ」という表情が見られません。結局追いつがったのもそこまでで、また差がずるずると開いて負けてしまいました。

追いつめたのに志気が高まらなかったのは、やはりエース中嶋の欠場とコート上でのリーダー副田の不調が大きな要因でしょう。ちなみに副田の後半の得点はゼロです。でも、膝の治療をする暇もないまま半年以上も奮闘している副田に責任を負わせることはできません。

平成九年九月 ウィンターカップ予選 優勝 スタメン 副田 井澤 森崎 高橋 本田

【案内文書】

九州大会が終わってからグラウンドトレーニングを週三回取り入れました。しかしそれは、七月下旬で打ち切りました。副田は膝の故障を抱えているのももちろん走らせません。しかし、森崎が膝の痛みを訴えて脱落、井澤が太ももの痛みのために脱落、もつとも訓練をしなければならぬ本田は血液検査の結果貧血と判ったので走らせられないという状況で、八月に入るとグラウンドで走れる選手はほとんど試合に出場しない選手ばかりになり、グラウンドに出るのがむなしくなりました。

八月中旬、国体チームの長期遠征のあとクレインズ単独練習になってから、本田はヘモグロビンが正常値に戻ったので練習に復帰。それまでスタメンだった三城に替えて突貫工事で本田をスタメンで起用するための練習をしました。今はまだ三城を使った方が安定しています。でも、三城のモチベーションがなかなかあがらず、それなら思い切って未熟ながらも本田を起用する方がまじかと思っただけです。本田は身体的にも未熟な一面だらけです。突貫工事に耐えられず、血糖値低下で練習の途中で立っただま眠ったりします。だから練習中にオレンジジュースを飲ませながら練習させます。こんなの私のコーチ人生で初めてです。

今年になって副田のシュート力が昨年に比べてガタ落ちです。それは膝の故障のせいでもあるのですが、副田以外の選手の頼りなさが副田のストレスになってきているからだと思います。その副田に、三年生最後

の試合で思い切りプレイをさせたい。そういう思いから、どうせ未熟なら無我夢中でやる本田の方が、やるかもしれないと期待させて結局他人にプレイを譲ってしまう三城よりもチームに刺激を与えてくれるのではないかと思い、思い切って起用しました。果たして結果は？

【結果報告】

嬉しいですね。とにかく嬉しいです。昭和五七年の県高校総体決勝。これは、私が腎出血で長期入院したあの試合で、諸々の不利な条件を選手と共にひとつずつクリアしてものにした勝利なので忘れられません。さらに、平成三年のインターハイ優勝は苦節十四年の念願が叶ったという意味で忘れられない勝利です。この時は記者会見で感想を求められたときに「もう、死んでもいい」と言いました。平成七年と八年は、全国優勝こそできませんでしたが、山梨インターハイの決勝戦をはじめ、ウィンターカップや国体で全国の人々から注目される試合をすることができたので忘れられない年度です。

そして今回、忘れられない試合がまたひとつふえました。会場で直接試合をご覧になった方は「そんなに内容のある試合でもなかったけどなあ」と思われるでしょう。それはデータにも示されています。今回の優勝を私が忘れられない試合の一つに加えた理由は私の心の中にあるのです。決して素晴らしい試合だったからではありません。六月上旬に県高校総体で負けた時「試合は有利な展開なのに選手は追いつめられた表情をしていた」と、私はこの報告書に書きました。その後、六月中旬の九州大会では一回戦で負けたものの「前半の戦いぶりは復活の兆しを感じました」と書きました。が、それもつかの間、日を追う毎にチーム全体に集団強迫神経症的な症状が広がっていき、練習すればするほど泥沼にのめり込んで行きました。そこで夏休みから九月の連休まで、遠征や招待合宿を数多く取り入れました。それは、少しでも他人と混ざってやった方が症状を軽減できるのではないかと思っただけです。ダメでした。

原因は次の三つです。

体力的な問題

プレイを読み取るセンスの問題

勇気や決断など、人間の本質に関わる問題

その中で、はたいした問題ではありません。これは訓練していけば確実に身につけてきますから。問題はとです。これは精神的な要素が多く含まれるので、訓練の量に比例して安定してくるものではありません。重要なことは「大丈夫なんだ」とか「私も棄てたもんじゃないぞ」と思えるような事象を如何にして提供してやるかです。

練習でも合宿でも試合でも、私はそのことだけを思ってコートに立ってきました。しかし、「これならなんとかなるぞ」という感触を得られないままとうとう試合の日が来てしまったのです。大会初日もひどい状態。二日目の初戦も変わらず、そして決勝戦のスタートから一〇分くらいまでは相手ペースと、好材料は何も見つかりません。でも、相手も決して鶴鳴のゾーンを気持ちよく攻めているわけではありません。

私はなんとかなるかもしれないと思いつつ試合を進め、後半「自分が主役！自分が主役！」を連発しました。副田以外の選手に自主性を持たせたかったからです。それまで不安そうな表情しか見せなかった下級生がこのことばに伝えてくれました。そしてその表情には「大丈夫かなあ」よりも「いけるぞ」という色が次第に濃くなっていったのです。

この試合が忘れられない試合のひとつに加わったのは、私がコーチとしてよりも精神科医のような立場でもがき苦しみ、治療に成功したという意味からです。試合終了と同時にドツと疲れが出ました。今も頭がガンガンしています。

【ボックススコアコメント】

嬉しいか？どうして嬉しいか？勝ったからか？東京に行けるからか？不安を乗り越えた自分がそこに居る

からか？さまざまな思いでこの勝利を噛みしめる。そして、この勝利を明日からのさらなる成長の糧にするんだ。

平成九年十二月 ウインターカップ二回戦敗退 スタメン 副田 斉藤 井澤 森崎 本田

【結果報告】

心の中では「今年はお出場するのがやっとだったんだから…」と自分に言い聞かせつつ、一方で「あわよくば…」と、かすかな期待を持っていました。しかし、結果は相手にかすり傷ひとつ負わせることができずに終わりました。チームのことを聞かれる度に「今年は大メだよ」と言っていたにもかかわらず放送関係者や実業団や大学の監督が何かを期待して周囲に集まってきました。辛かったです。

負けた日の翌朝、五時に東京を発って神戸に向かわなければならぬのに目が冴えて眠れません。十二時、一時、二時、三時、四時…とうとう眠れないままの出発になってしまいました。いつもは途中休憩の仮眠などはまったく不要ですが、今回は四回休憩し、その度に仮眠を取りました。

ともあれこれで平成九年度が終わりました。最後の試合で副田に満足して貰える試合ができなかったのが心残りですが、気持ちを切り替えて来年に目を向けなければなりません。二五日の午前十一時頃長崎に到着し、その日の午後一時から練習を始めました。しかし、帰りのフェリーの中で本田が熱を出し、当地区後すぐ病院へ。また、翌日に下田が熱を出して休養と、新チームの練習開始早々スタメン二人が不在となりました。これもチームの実力のうち。このようなチームを、生活のしつけから試合の駆け引きまで、これから一つひとつ仕込んでいくのです。

二 心因性 症候群【平成一〇年度】

平成九年一〇月 地区新人戦 優勝 スタメン 森崎 井澤 下田 高橋 本田

【案内文書】

新チームはなかなか思うように伸びてきません。森崎・井澤・下田・高橋・三城・本田・松田・田中の八人が主戦力としてある程度の計算ができるようになって貰わなければならないのですが、日によって個人個人の値段の上がり下がりがひどく、まだチーム力を計算できる段階に至っていません。

理由はわかっていきます。プレイを読む力が身につけていないからです。それには二つの原因があります。プレイ経験が浅いということと性格上の問題です。選手の中には前者のみを解決すればよい者、後者のみでよい者、両者とも解決しなければならぬ者などさまざまです。

解決策ですか？ それは選手の好奇心や探求心を向上させる以外にありません。そのためには、選手が「そうか」と思うような材料を現象の中から引き出して与え続ける努力を私がやればよいのです。叱ったり怒鳴ったりしごいたりすれば解決するのなら簡単ですけどね。なかなか…。

【結果報告】

決勝戦。前半三八対二〇。普通、誰が考えてもクレインズ楽勝のペースですよ。でも後半のクレインズは違うチームみたいになって出来が悪く、危うく負けそうになってしまいました。しかし私は、ふがない奴らだとは思っていません。むしろ、前半の上出来を褒めてやりたいです。今のクレインズはそういうチームなのです。

後半滑り出し、まだ点差はかなり開いているのに「まずいぞこれは」と思いました。選手の動きと表情が前半と違うのです。今年のチームは通常の練習でもよくそんな現象が起きます。案の定、後半開始から十一分間でわずか二点しか取れない貧攻。しかし、この試合は新チームの初陣です。これから先がまだあります。私がバタバタして手助けしても先のことを考えれば得策ではないと思い、タイムアウトは取らずにじっと観

察しました。

残り一〇分で四点差まで詰められたところで、フリースローの時間を利用してサイドラインに森崎と井澤を呼びつけ「お前たちの声と行動で一年生を安心させてごらん、それが勝利を呼び込む最良の方法だし、自身の財産にもなるから」と言いました。二人はそれに応えてくれました。私が初めて見る上級生らしい二人でした。まだまだ山あり谷ありが続くでしょうが、森崎と井澤にとっては自力で初めて危機を脱出して勝ち取った勝利です。こんなに貴重な財産はないでしょう。個人的には、疲れた本田に替わって後半の苦しい場面で出場した三城がチームを救ってくれました。今日の三城はアツパレでした。

【非公開のボックススコア用コメント】

ティア(森崎)とリフ(井澤)へ。この試合は地力で脱出できる試合として評価していいよ。財産がまたひとつ増えたね。

平成九年十一月 県新人戦 優勝 スタメン 森崎 井澤 下田 高橋 本田

【案内文書】

十一月に入って突然光が見え始めました。一つには、駄目元でスタメンに起用してみた本田がなんとか使えるようになったからです。まだ未熟さだらけですが、九月の本田とは別人です。もう一つの理由は、選手の到達度の判定を私が錯覚していたことが判明したからです。森崎や井澤は一年生の時から上級生と共にプレイし、ランニングスルーも数多くこなしてきたからプレイ作りの観点はとらえていると思っていたのですがそれは私の勝手読みでした。毎年選手は変わります。昨年二ヶ月でマスターしたから今年も二ヶ月でマスターしていると思い込んでいた私がバカでした。

光が見えたといつてもわずかに二週間程度で公式戦にその成果が出るほどバスケットボールは底の浅いスポーツではありません。相変わらず未熟さは頻繁に出ますが、訓練の主体をどこに置けばよいかはつきりしたことを私は光が見えたと言いたいのです。これで、喉につかえていたもやもやがスッと消え去りました。あとは私がいかに能率的に選手にそれを浸透させるかです。

今年は昨年のように世間を騒がせるチームになるには材料不足かもしれませんが、みなさんに「クレインズらしさは出てるよ」と言いつて貰えるチームになってくれるのではないかと、今は思えるようになりました。

追伸

これはバスケットボールとは関係ないことですが、新人戦前にミャーが校内のドアで挟んだらしく、皮一枚でようやく繋がっているシッポをぶら下げながら体育教官室に帰ってきました。すぐかかりつけの動物病院に連れて行き、縫いつけて繋いでもらいましたが、しばらくするとそこから先が腐りはじめたので遂に切断してしまいました。ケガする前は三〇センチぐらいあったのに、八センチしかないシッポになってしまいました。

【結果報告】

十一月十三日、保健室から内線電話がかかってきました。「本田さん三九度も熱がありますよ」。その時点では養護教諭のK先生も本人も扁桃腺炎だと思っていました。「仕方ないよ。最終日だけでも出られればいいから焦るな」と言いつて私は本田を早退させました。翌十四日の夜八時に電話してみるとお父さんが電話に出られて「熱がどうしても下がらないので病院に息ました」という返事。

それから二時間後、お母さんから電話があり「先生、肺炎でした。マイコプラズマです。すみませーん」と恐縮した様子。これで出場は絶望です。本人は、病院の先生に最終日だけでも出場したいと泣きながら食いつながったそうです。本人も今度こそ本物になれるかもしれないと思つていたはずなので、その気持ちはよくわかります。

本田は先月の地区新人戦から使われ始めました。でも、あの時はコートに居るだけという存在で、五人のうちの一とは計算出来ない状態でした。しかし今回は本人も自分の成長を自覚していたし、チームメイト

もそれは認めていました。本田自身、入学以来初めて家族に「今度の試合は観に来てね」と言ったそうです。おそらく彼女のこれまでのバスケット生活の中で、これほど意欲をもって臨んだ試合はなかったでしょう。しかし、神様もいじわるですね。

大会初日、試合が終わってから私は選手をマイクロバスに乗せたまま聖フランシスコ病院に直行しました。大勢病室に押しかけても他の患者に迷惑をかけるので四人だけ代表を連れて病室に行きました。「いいさ、成長したのは間違いないんだから、一月の試合で二回分暴れる」私はそう言っただけで本田を慰めました。私も「成長したと言ってもまだまだ未熟さだらけなのだから、あと一ヶ月でもっとうまくしてやり、まわりをアツと言わせてやるぞ」と思いました。かわいそうだとは思いますが、試練が厳しいほど人間は成長するものだと思わなければなりません。

さて次は試合の報告です。一言で表現すると、一回戦から決勝戦まで「これぞクレインズバスケット！」と思わせるチームと「集団強迫神経症がまだまだはびこっているなあ」と思わせるチームが交互に登場した試合だったと言えるでしょう。それも、相手が弱いときには「これぞクレインズ！」で、相手が強いと「集団強迫神経症」になるのではなく、全く逆の現象も起こるのです。観戦者の中には「鶴鳴もまだまだだな」という人がいるでしょうが、私は「これぞクレインズバスケット！」が皆無に近い状態から、しばしば出現するようになってきたことを成長の証と思っています。

次は個人的なことです。まず井澤。私の中の彼女は「難しい局面では非常に危険な選手」という評価でした。その井澤が決勝戦残り五分間の非常に緊迫した状態の中、チームメイトをリードして勝利をもたらしてくれたのです。私は終盤の彼女のちょっとした動作や表情を見て井澤が強迫神経症から抜け出たと感じました。それからは「リフーお前が仕切れ！何をやってもいいぞ！」と言い続けました。「守れ！」とか「リバウンド！」とか、具体的なプレイの指示は一切しません。井澤は見事にチーム、メイトをまとめ、試合をしめくくってくれました。

これで井澤が「難しい局面では非常に危険な選手」から「苦しい時に頼りになる選手」に変身してくれたかというところは言い切れません。それは、井澤を信用していないというのではなく、一人の人間が過去を断ち切って変身するというのは大変なエネルギーを要するということを私は知っているからです。変身し切ったとは言えなくても、井澤自身がこの試合をこれからの自分の人生の岐路にしようとするはず。私は、私の持っているものを出し切ってそんな彼女を応援したいと思っています。

次が高橋。私の中では彼女は「難しい局面ではもっとも危険な選手」という評価です。相変わらず、「すごい！」と思わせるプレイをするかと思えば目を覆いたくなるような逃げ腰のプレイをします。その高橋が、決勝戦の残り五秒ぐらいの時にディフェンスにあおられて危うくなりました。いつもの高橋ならほぼ間違いなくボールを奪われるケースです。私は「後味の悪い終わり方をするなよ」と祈るような気持ちで見えていましたが、高橋はグツと腰を割って相手を振り切り、ドリブルからパスをさばいて切り抜けたのです。そこでボールを奪われてもシユートを決められても勝敗には影響のない場面でしたが、高橋にとっては井澤同様過去を断ち切ることができるか否かを左右する重要な場面でした。高橋も一段階グレードアップしたのかも知れません。

今年のチームの采配は試合が終わったあとドツと疲れます。しかし、不安定要素がたくさんあるだけに、材料の取り上げ方からことばのかけ方で、もう一度見直さなければならぬことがたくさん出てきて、コーチとしては大変勉強になります。

追伸

ミヤーは十二日に抜糸しました。傷口も治って元気に活動しています。健康には何ら影響ないのですが、シッポが短くなったネコって情けないですね。

【ボックススコアコメント】

誰が点数を多く取ったとか、誰のミスが多かったとか、そんなことで誰が活躍し誰が足を引っ張ったかな

どとは言えない。みんなよく頑張った。押しつぶされそうな緊張感の中で、必ず誰か一人は踏みとどまり、それを軸にして難しい局面を乗り切った試合だった。地区新人戦同様、自慢していい試合だよ。

平成一〇年一月 九州春季選手権二次予選 優勝 スタメン 森崎 井澤 下田 高橋 本田

【案内文書】

ウィンターカップから帰ってすぐ、二五日から二八日まで鹿児島女子高校と一緒に合宿しました。この合宿では下田と本田が風でダウン。それに加えて田中の疲労骨折が再発。松田はウィンターカップからそのまま帰省させたので、鹿児島女子高校との練習試合では森崎・井澤・高橋・三城・山口のスタメンに、控えは平野だけという状態で切り抜けなければなりませんでした。

明けて二日から六日までは県外から三チーム（宇部女子・神村学園・九州女子）集まって、毎年恒例の合宿です。この合宿では、田中以外の選手は復帰しましたが、病気とか失敗とか敗戦というような事態が発生すると、クレインズでは不安や恐れが誰かの気持ちの中で頭をもたげてきてそれがチーム内に感染していきます。強いチームになるとこのような感染症なくなります。

でも、以前「集団強迫神経症」ということばを使いましたが、それは脱皮しつつあるとは思いますが。それは、個人的には森崎の成長によると思われれます。彼女は事態が悪くなってもパニックに陥りそうな自分を抑え、戦いに挑む姿勢を見せてくれました。チームとしては、合宿最終日に苦しい試合を乗り切れたことで証明できると思います。具体的に言つと、九州女子と四本行ったスクリメージが立ち上がりメロメロで二連敗。「また集団強迫神経症か」と思われたのですが、あとの二本をゾーンプレスで挽回。二勝二敗の五分に戻したことです。しかし、最終戦は本田を出せず仕舞いでした。気持ちが悪縮していたからです。何事も一足飛びとはいきません。私は失敗の怖さがわかるようになったのを彼女の成長する直前の壁ととらえています。

【結果報告】

一日目を終えて帰宅するとハガキが一通届いていました。差出人は石毛宏典氏。ダイエーホークス二軍監督就任の挨拶状でした。しかも直筆で一筆書いてあります。「今後もいろいろとアドバイスをよろしくお願ひします」

私は石毛氏とは二度ほど会ったことがあり、そのうちの一回は鶴鳴のウィンターカップをわざわざ見に来られたことがあります。たぶん、中村和雄氏の誘いで観戦されたんだと思います。とはいえ石毛氏はプロ野球のコーチです。その、プロスポーツのコーチが、一介の地方高校監督の私に直筆の挨拶状をくれたのです。私はその謙虚さとひたむきさに心を打たれ、そのハガキを片手にしばし呆然としていました。そして、「山崎純男しっかりしろ！」と言って自分の頭をゲンコツで殴りました。

というのも、会場から家に着くまでの私は一日目の試合のあまりのふがいなさに少し気が滅入っていたのです。石毛氏のハガキを見るまで選手のミスブレイのことばかりがアタマの中を占領していた私は、「お前が元気づけてやらなくて誰が元気づけるんだ」と、自分に言い聞かせて選手一人ひとりの顔を何度も思い浮かべました。そして手の甲に KENTUCKY と書きました。KENTUCKY の意味は、KENTUCKY HIGH SCHOOL の DONALD MORRIS コーチのことを思い出したからです。

二日目。一戦目が佐世保商業、二戦目が純心です。そしてやはりミスは連発します。でもそれが今年の一チームの力なんです。私はなりふり構わず声を張り上げ、選手を激励続けました。二試合ともほんとうに負けそうな場面があり、また、二試合とも辛勝でしたが、見事に勝つのも力のうちだけ負けてもおかしくない試合を負けなかったのも力のうちだと私は評価してやりたいと思います。

平成一〇年二月 九州春季選手権 一回戦敗退 スタメン 森崎 井澤 下田 高橋 本田

【案内文書】

この大会の県予選は一月十四・十五の両日行われました。この試合の翌日、井澤がふくらはぎに痛みがあ

ると訴えて練習から離脱。同日、高橋が試合中に腰を打撲した痛みが取れないという理由で同じく練習から離脱。さらに三日後、下田が胃潰瘍(まだ高校生なのに…)どんなストレス抱えてるのでしよう?)再発で学校を休み、戦線離脱。月末には森崎が膝からふくらはぎにかけて痛みが走り力が入らない訴えて練習から離脱。二月に入つての練習はスタメン四人が不在という状態で練習しなければならなくなりました。

私はこの症状を心因性 症候群と名付けました。特に森崎と井澤には、なかなか進歩や安定の兆候を見出せないチームの現状がものすごい重圧としてのしかかっています。そのような状況下に置かれた人間というのは、心身に何か異状があればそれが増幅され、それがまた不安を募らせます。現に、心理的重圧からプレイを悪い方に導き、自滅するというケースが県大会でもたくさんありました。

このような状況を打開するには、何でもいいから選手の心をホツとさせる現象が起こることです。それは練習メニューの工夫かもしれませんし起死回生策戦の考案かもしれません。大会まで時間があまりありませんが私は今それを模索中です。選手たちが県大会と比べて見違えるような試合をしてくれるのか、もっとひどい試合になるのか、その答えは今私にもわかりません。しかしこの大会で「やっぱり山崎純男はただものじゃないよ」という事を証明したいと私は思っています。

【結果報告】

観戦者の中のクレインズ通の人々の感想を紹介します。

「前半も後半もどちらも今年の鶴鳴の真の姿だよなあ」です。当たっています。まだ体力も気力も充実している間は先輩が嘗々と築き上げてきたクレインズらしさがプレイの随所に出てくる。しかし、今年のクレインズは疲れが溜まってきたりプレイのリズムが狂い始めるとそれが次々とチーム内に伝染し、泥沼にはまりこんでいくと彼等は言いたいのです。

その泥沼状態について私なりの見解を述べます。

人は誰でも、一生のうちに何回も、競技会や試験や発表会など自分を試される場面に遭遇します。それに臨むに際し、充分準備して臨む者、中途半端な気持ちで臨む者、まったく準備しないで臨む者など、その心構えも人によってさまざまです。そして、それぞれに相応の結果がもたらされます。クレインズに与えられた結果は「充分準備しないで試合に臨んだ者」に与えられた結果です。

「充分準備しないで」の内容は、試合直前に怪我人や病人続出で充分練習ができなかったという意味ではありません。毎日の取り組み、コート外での生活、その他諸々のことに対する心構えなど、すべてに最善を尽くしていない生活を送っているということを意味しています。試合や試験や発表会で成功するのに魔法や手品はありません。毎日の積み重ねが大切なのです。

次の重要な試合は6月上旬のインターハイ予選。それまで約三ヶ月余。それには「今度は充分準備してきましたよ」という顔でコートに経たせたいのですが…。

今年のようなチームでも、クレインズ目当ての観戦者が何人もいます。面識のない他県の中学の先生から「鶴鳴のプレイを観に来ました」と言われたことばが今も耳の底に焼き付いています。

平成一〇年四月 県下春季選手権 二位 スタメン 森崎 井澤 高橋 野田 成井

【案内文書】

新入生が三月中旬から練習に参加してくれました。以来約二週間、上級生はコーチ役です。突貫工事で新入生にクレインズバスケットのノウハウを教え、三月下旬は他県のチームとの強化合宿。さらに四月に入つてすぐまた遠征合宿です。そして一息つく暇もなく春季大会。選手たちは少し疲れ気味ですが展望は開けてきました。というのはこの半月で、これまでの主力選手に加えて新入生六人全員をローテーションに組み入れながら戦えるメドがついたからです。

と、こう書けば気の早いクレインズファンは「不死鳥蘇る」とかなんとか言つて騒ぎそうですが、そこはなんととっても新入生、手直し箇所はたくさんあります。早とちりしないでください。弱点や手直し箇所は

あるものの、公式戦を消化しながら上達していくだろうという見通しがついたということです。そうなること、これまで力不足ながら主力選手として重責を背負わされていた新二年生が少し肩の荷を下ろして伸び伸びやれるのではないかと思っています。

ともかく、二ヶ月前の二月には「ケガをして渡りができずに置き去りにされた越冬鶴」でしたが今では課題山積みとはいえ「ケガも癒え、本体が戻ってきて活気を取り戻した鶴軍団」という雰囲気ของทีมになりました。

【結果報告】

すみません。負けさせてしまいました。前半三六対二〇。ほぼ勝負ありです。私は欲を出してできるだけ新入生に実戦を体験させようと思い、ドラウト（得点が入らない状態）が何回も訪れましたが辛抱して新入生を起用し続けました。練習では体験できない難しい局面をもうちょっとで切り抜けそうになる場面がしばしば出ます。またとない訓練のチャンス逃すのがもったいなくて夢中になって新入生にことばをかけているうちに点差を縮めた相手が息を吹き返してしまい、最後に抜き去られました。入学して二週間も経たない野田と成井をスタメンに起用し、彼女らに少しでも多く実戦の体験を積みませようとした私の責任です。

今日から新入生にも体力トレーニングメニューが加わり、体力強化をしながら五月の連休の岡山遠征で実戦を積み上げ、六月上旬の高校総体に臨みます。高校総体はインターハイの予選ですから今回のような冒険はしません。石橋をたたいて渡ります。

試合の采配もさることながら大変なドジをやってしまいました。

返還しなければならぬ優勝旗を学校に忘れて出発したのです。事務室に連絡をしたら丁度事務室に居た校長先生が電話に出られ、「私が決勝戦を応援に行くから届けますよ」と言われました。私は恐縮でしたがそのようにお願いするにしました。ところが準決勝で負けてしまったのです。慌てて学校に電話したのですが校長先生はもう出発したあと。結局私は校長先生に優勝旗を届けさせるためだけに島原と長崎の間を往復させてしまいました。「ま、いろんなことがあるさ」と気軽におっしゃって、校長先生は優勝旗を渡すとすぐ帰られました。試合結果より私はそのことが悔やまれます。校長先生は、元長崎北高校の校長でしたが退職され、今春鶴鳴の新校長として赴任されたばかりです。新任の校長先生に私がお願いした最初の仕事があんなこととは…。

平成一〇年五月 岡山遠征 練習試合八試合 五勝三敗

【合宿報告】

昨年この時期にも招待されて岡山に行ってきました。三月にこの合宿のお誘いを受けていたのですが私は返事をしづっていました。というのは、三月以降は新入生にクレインズバスケットのノウハウを急いで教えなければならぬ事情があったからです。

練習試合というのは実に大切です。しかし、基礎固めをしないままの練習試合は単に体力を消耗させるだけで無駄です。だから私は返事をしづりました。結果的に再三の要請に負けて参加させて貰うことになったのですが、今ではこちらから頭を下げてお願いすべきだったと思うくらいの成果があった遠征になったと思っています。

さて、チームが強くなるためには技術強化や体力強化だけでは足りません。選手の人間性そのものを高めなければ、強化した体力も技術も大事な場面では使いこなせないのです。人間性が高いとか低いとかいう基準は何かというと、それは勇氣・決断・冷静など、人間が何かを成そうとしている時の精神状態のことを言うのだと私は思っています。

そのような精神を高めていくには、コート上だけでなく日常生活のあらゆる場面で起こる事柄に強い関心を持ち、それらを観察したり自分がとった行動を自己評価する習慣を身につけさせなければなりません。

今回の遠征も、新米マネージャーを初参加させたことによるトラブルがいろいろ発生しました。それらの

トラブルは決して新米マネージャーの責任ではなく、上級生の気配りが足りなかったこと以外の何物でもありません。私はそれらのトラブルを一つひとつ取り上げ、選手全員の中の返して考えさせました。言われてみれば簡単なことで誰でもわかることですが、自ら気付くようになるまでにはその都度取りあげ、こうして返してやらなければなりません。私は今回の遠征では試合以外のことで選手に自分や他人を観察する目が少しでも養われたという点において非常によかったと思っています。

心配していた試合内容ですが、負けた試合も勝った試合もそれぞれに収穫がありました。それは、私自身が「もう少し練習を積んでから…」とと思っていた技術内容が、試合を消化していく中で身に付き、実行できた場面がたくさん出てきたことと、理屈抜きのすばらしいファイトで選手が戦ってくれた試合があったからです。

私が自分自身を反省させられたのが徳島成年女子との試合でした。この試合はすばらしい試合でした。ベテランの元全日本の選手たちを相手に後半は四点差まで詰め寄るなど、本当によく戦いました。私は「正しいバスケット」を教えることばかりをアタマにおいて新入生を育成してきました。その視点は練習でもこのような対外試合でも同じです。ところが、徳島成年女子とは若さをぶつけるだけに集中したのです。元全日本チームの選手に技術や戦術で太刀打ちできるわけがありません。試合は終始オールコートプレス。すると選手は大善戦。すばらしい結果を生み出してくれました。

私は大切なことを忘れていたのです。それは、正しい理論や技術も大切だがそれよりももっと大切なのはファイトすることだということです。「大切に育てよう」「急いで戦力にしなければ…」という思いが「合理性」とか「能率」という考えを優先させ、原点である「闘う」という精神をどこかに置いて私は選手を指導していたのです。これは私の欠点で、ずっと前にも同じようなことで反省した記憶があります。この遠征は、私にそれを気付かせてくれたという点において本当にありがたい遠征でした。

平成一〇年六月 県高校総体 二位 スタメン 森崎 井澤 下田 高橋 成井

【案内文書】

三月中旬から五月中旬までの練習のテーマは、新入生にクレインズバスケットを如何にして早く浸透させるかでした。だから、練習試合でも公式試合でもすべて、またチーム内のスクリメージにおいても試合形式の練習はすべて、新入生のプレイタイムを多くしてやるように配慮してきました。

新入生の中には確かにキラツと光るものを見せてくれる選手がいます。でもそれも現段階ではあくまで「可能性」の領域を越えるものではありません。私はその「可能性」を今度の総体までに「戦力」の域まで引き上げようと思ってやってきましたが、それは無理でした。無理というのは伸びなかったという意味ではなく、それぞれにずいぶん成長しましたが公式戦の重要な試合をまるまる一試合彼女等の成長に賭けてみるというのは負担が重すぎるという意味です。

このように、新入生は現段階ではあくまで「可能性」ですが二年生や三年生には「確実」というものがあります。例えば森崎や井澤は何と言っても全ての面で三年間のキャリアを感じさせるものがありますし、下田のスピード、高橋のリバウンドなどなど、これらは試合の重要な場面では新入生の「可能性」よりはるかに信頼性があります。今度の総体ではこの「確実」と「可能性」をつまく調査して戦います。決して春季選手権のような采配はしません。

【結果報告】

申し訳ありませんが、今回は多くを語りたくありません。

【ペンの力】

これが結果報告のコメントである。一行だけだ。こんなことが五〇年のコーチ生活の中で二回あった。こんな時は、自己反省ではなく、許し難いことが選手たちの中で起きた時だ。しかし、具体的に何を誰がやらしたということは書かない、「誰が」「何を」を文字にすれば特定の選手を誹謗中傷することになるから

だ。とはいえこれまでの文中に「A選手は難しい局面ではすぐ逃げ腰になる」とか「B選手は日常生活が甘い」というような表現を用いたことがある。そのようなことを書く場合は、A選手やB選手がそれを克服して危うい場面を乗り切ったりチームを救ってくれたことがその後出て来ない限り書かない。それが出てこないのを書けば、「あいつは情けないヤツだった」という批評のまま卒業させることになるからだ。ペンを持つ者はそれを絶対守らなければならない。

平成一〇年六月 九州高校総体 一回戦敗退 スタメン 森崎 井澤 高橋 成井 野田

【結果報告】

私は試合終了後、選手を集めて「負けたけれども、こんな状態になったら今のクレインズは立ち直れないよ、というようなケースを二度挽回した。これは今までになかったことだ。これをもとに、九月のウィンターカップ予選に備えれば良い」と言いました。

ところがそれから三〇分も経たないうちにそれを帳消しにしてしまうような出来事がありました。私は本当にがっかりしました。また振り出しに戻ってしまいました。

【ボックススコアコメント】

出来事の具体的な内容は公表しなかったけれども出来事そのものは敢えて公表した。それは、真のチャンピオンになるまで決して忘れて欲しくないからだ。肝に銘じておけ。

【人創り】

その出来事の内容を私は具体的には覚えていない。第一章でも述べたが、平成十八年度から平成二十四年度まで、人の内面に潜んでいる邪悪さとの戦いを制することができないまま私はリタイヤすることになったが、平成九年度から十一年度もまったく同じ状況であった。ではそうでない年はよい子が集まっていたかというところではない。それを退治できた選手がいたということだけの違いである。自分の愚かさを退治できる選手を創る。それこそがコーチのもっとも重要な仕事であるが、脅しや洗脳という手法を用いず、教育という手法だけでそのような選手を創りあげるのは難しい。

平成一〇年八月 九州国体予選敗退 純心七・鶴鳴五 スタメン重松(純)原(純)古閑(純)井澤(鶴)森崎(鶴)

【案内文書】

背番号十三の下田(鶴)と背番号十五の三城(鶴)が大会直前にケガをしたため急遽メンバーを変更しました。でも、戦力はダウンしません。

『予選リーグ宮崎戦』

会心の試合でした。総替えのタイミングが実にうまくいき、混成チームにありがちなリズムの乱れもなく、ディフェンスもオフenseも非常にスムーズに運べました。

『予選リーグ沖縄戦』

ただし一〇分間、多彩な個人技を使った沖縄独特のバスケットに翻弄され、一気に突き放されましたが、それ以後の試合内容は互角といっても過言ではありません。前半の終わり頃、長崎の猛反撃でじりじり点差を縮めている最中に、焦りからフリースローを六本連続失敗したのが試合の流れを大きく左右しました。これも後手に回ったからこそそのミスで落とした選手に罪はありません。

ともかく、混成チームというのは運営がなかなか難しく、不協和音で作品を台無しにしたのではないかと思われるチームがいくつもあつた中、我が長崎はまさに両者の持ち味を充分に使い切り、現状では最高の力を出し切った試合ができたと思います。コマ不足をいくら嘆いても仕方ありませんから、このような積み重ねを大事にしていきながら、再び全国の頂点に立てるよう努力したいと思います。

追伸 決勝リーグの得点差は、二位狙いのために捨てゲームをするため、実力差と判定するのは危険です。

平成一〇年九月 ウインターカップ予選 優勝 スタメン 森崎 井澤 高橋 野田 成井

【案内文書】

下田が九州国体直前に腰を捻挫しました。かなり回復していますが今大会の出場は微妙なところです。三城はまた貧血再発です。野田の二回の足首捻挫と鼻骨骨折は完治しました。鼻は前よりまっすぐになったようです。

【結果報告】

課題山積みですがとにかく勝利をもち取りました。勝因は次の三つだと思います。

純心のS選手の外角シュートを封じるためのディフェンスシステムの成功。

選手が試合中にしっかりと私の目を見ながら指示を聞き、理解できたこと。

個人的には高橋と野田が終始堂々とした態度で試合ができたこと。

と についてはこのチームになって初めての出来事です。特に についてはこれまでどんなにわかりやすく具体的に指示をしても、選手はただ返事をしていただけで目は泳いでました。私はこの症状にカタツムリ症候群と名付けました。今回もしばしばそれは現れましたがそれがずっと尾を引くということはありませんでした。ひよっとしたら、最近開発したクレインズ独特のイメージトレーニング（練習中のブレイクタイムを利用して、目を閉じてそのあとの練習をイメージし、そのイメージの中で自分を活躍させる）が功を奏したのかもしれない。

野田の不安定さは自分のアタマの中に描けるバスケットが乏しいからです。それを解決するにはこのような経験を重ねながらイメージできるプレイを増やしていかなければならないでしょう。

高橋は現在長崎県ではナンバーワンのK選手にマッチアップされましたが、「今は私の方が一枚上手だよ」という態度で終始プレイしていました。おそらく、バスケットに限らず高橋がそんな気持ちで仕事をやり遂げたのは生まれて初めてだと思います。

成井はまだまだ寝る間も惜しんでバスケットがイメージできるようなアタマに切り替えていかなければなりません。これからです。

【ボックススコアコメント】

俺は、長崎新聞のMさんに「優秀な選手を揃えて全国優勝するのも立派だけど、この勝利もそれに匹敵する価値があるよ」と言った。本音だ。みんな本当によく戦った。でも純心には勝ったけれども本当の敵に勝ったかどうか、自分としっかりと向き合って考えてみる。本当の敵とは自分の心の中に住む化け物のことだ。そいつはいつも自分の主人を惑わせよう失敗させようと企んでいる。俺の見方は、お前達がその化け物を再起不能にまで退治したとは思えない。ウインターカップまで約三ヶ月。それまでにもう少しその化け物をやっつけて、みなさんに「クレインズバスケット健在！」を示して欲しい。

平成一〇年十二月 ウインターカップ本戦 一回戦敗退 スタメン 森崎 井澤 高橋 飯笹 田中

【案内文書】

本来のスタメンは、森崎・井澤・高橋・野田・成井なのですが、故障者続出でこうなっていました。高橋も疲労骨折の初期ですが無理させない程度の練習でなんとか本番まで引っ張っていきます。

こんなことは嘆いていても仕方がないので、「この際悪いことはすべて起きてしまえ」と開き直っています。また、高橋はGFで仕事をさせるよりFCとして起用した方が負担が軽くなると思って県新人戦以後コンバートしました。その結果、十一月二三日の佐賀清和とのスクリメージでは復活賞を貰うほど活躍しました。チームとしても、やたらに動き回るオフエンスシステムに改良を加え、最近それがようやく使えるようになってきたところです。だから、故障者は多いものの重い気分ではありません。

【結果報告】

ボックススコアには空欄（ケガ病気なしを意味する）が七人。半数以上が但し書き付きでの出場です。

高橋 十一月下旬。腓骨疲労骨折症状が出る。軽度のため練習軽減で継続。
三城 十一月中旬。足底筋膜炎の症状が出て休養約一ヶ月。改善せず。

松田 大会出発一週間前。右肩脱臼。三週間安静。

山口 十一月下旬。中東度腓骨疲労骨折症状出る。約一ヶ月休養。

野田 一〇月十一日。突然膝痛を訴える。休養するも軽減せず。一月二〇日関節鏡検査予定。

成井 十一月下旬。リスフラン関節（足の甲）捻挫。足首捻挫よりやっかいで長期化。

高島 十一月十九日。フェリー内の風呂場でカミノリで左手を切る。アホ！

宮原 十一月下旬。足首の内踝痛。原因不明。長期化？

とても戦いに臨むチーム状態ではなく、最悪のコンディションで臨んだ大会ですから試合内容を分析して報告することは何もありません。ですから今回は番外編を報告します。

私たちが長崎に帰ってきたのは十二月二十九日です。もし一回戦で負けてすぐ長崎に帰ると二八日までは練習なので、成井・高島（茨城）・松田（千葉）の三人を長崎まで連れて帰らなければなりません。それは可愛そうだといって、ウィンターカップからそのままこの三人を帰省させると年末練習の人数が足りません。そこでジャパンエナジーに無理を言って居残り合宿をさせてもらうことにしたわけです。ところが、前述の表に示すとおり成井と松田はまったく練習できず、高島も用心しながらという状況。もう踏んだり蹴ったりです。

しかしここで救世主が現れました。新潟市下山中学校の重村典子と重村安紀の双子姉妹（母親は昭和五一年度本校卒業の狩野和代 興銀）です。彼女たちは来春鶴鳴を受験するのですが、ウィンターカップを観に来てそのまま鶴鳴の合宿に参加してくれました。私はこの姉妹を引き受けすることにしたものの一度もプレイを見たことがなく今回が初めてでした。その経緯を話すと、ずっと前母親から「うちの娘が双子で二人ともバスケットしてるんですが、鶴鳴で通用するかどうか…」と電話がかかって来ました。その時私は「お前の娘なら見る必要ない。面倒見るよ」と言って、鶴鳴の待生で引き受けることを伝えていたのです。ですから私は「あの親のDNAを受け継いでるなら大丈夫だろう。でもハズレだったらどうしよう」と、期待と不安を同居させながら二人のプレイをじっと観察していました。

新チームで心配なのはガード陣です。その、私の心配を見透かしているかのようにこの二人は次々とナイスプレイを披露してくれます。私はホッとしました。平成十一年度のガードはもう心配要りません。これからケガ人のリハビリに時間をかけ、チームが元の状態に回復するのは早くても三月中旬。その間、じっと我慢の時を過ごさなければならぬクレインズに光りが差しました。

【ボックススコアコメント】

山崎語録 選手の一部 五：知ってるか？ 「ケガや病気も実力のうち」だ。俺のコーチ生活三二年で初めての出来事だよ。運や偶然だけで片付けられない何かがあるはずだ。胸に手を当てて考えてみる。思い当たることがないか？

三 光明【平成十一年度】

平成一〇年一〇月 地区新人戦 二位 スタメン 高橋 野田 成井 高島 宮原

【案内文書】

新チームのキャプテンは高橋です。照れ屋で臆病で、あいさつも蚊の鳴くような声しか出せなかった彼女がキャプテン指名後少し変わってきました。これを契機にひとまわり大きくなってくれればいいなと思っています。副キャプテンは松田です。

さて、夏休みはディフェンスの強化に終始し、かなりディフェンス力がついたと思っていたのですが、九月上旬に行われたウィンターカップ予選では強化されたはずのマンツーマンディフェンスでは勝負できず、

やむなく特殊ディフェンスで優勝をもち取りました。だから、優勝はしたものの私は少しがっかりしていました。しかも、ウィンターカップ予選以後新チーム練習に切り替えてみると、森崎・井澤が抜けたあとのゾーンオフENSは目も当てられないほどひどいものです。二重のショックでした。

そこで、九月中旬以降は練習の七割以上がゾーンオフENS、二割がマンツーマンディフェンスの再強化、一割がシューティングという内容で進めてきました。結果ですか？ 公式試合を一度経験してみないと正確な判断はできません。練習の出来を採点するかぎり上達しているとは思いますが、何しろ不安定なので…。

【結果報告】

新チームはキャリア不足なので、練習だけでなく練習試合を多く取り入れなければなりません。九月十五日佐賀北（新チーム）、二六日佐世保西、十月一日と十一日は鹿児島遠征で練習試合（鹿五島女子・神村学園・鹿児島成年女子）を重ねました。

九月は全て圧勝。鹿児島遠征は成年女子に一敗しただけで他は負けがありません。しかし、鹿児島遠征の二日目にアクシデントが起きました。ガードの野田が膝に痛みを訴えたのです。捻ったり打ったりしたのではないので重症ではないと思いますが、帰崎後膝に水が溜まったので専門医に診て貰い現在静養中です。

これを契機にこの一週間でガタガタツとチームが乱れました。そのような心理状態で臨んだ試合に好結果を期待するのは虫が良すぎます。予想通りの大敗でした。野田がケガをしたことよりも、そこから発生したほころびがどんどん広がったのが大敗の原因です。

何か心配の種があったり、少しだけプレイのリズムが悪くなったりするとこんな風になるというのがもう二年以上続いています。それは、さかのぼればリクルート失敗にあると思われれます。一瀬（平成四年）、鴨川（平成五年）、櫻田（平成七年）、工藤・大野（平成八年）のような、理解力・勇氣・判断を備えたりリーダーがここ三年一人も育っていません。今年、こんな選手が一人でもいたら高橋・成井・高島は不器用とはいえもつと活躍させられるはずです。しかし、前述の一瀬以下五人の選手たちも当初からそうだったのではなく、訓練を経て成長したのですから、今年は野田をなんとかそんな選手に育てあげたいと思っています。

【ボックススコアコメント】

自分のプレイを頭の中で巻き戻してごらんよ。それを普段の練習や四日間の練習試合と比較してごらんよ。

平成十〇年十一月 県新人戦 三位 スタメン 三城 飯笹 田中 山口 成井

【案内文書】

野田の膝は痛みがとれないので二二日に関節造影検査をしました。その結果、半月板損傷、膝蓋骨軟骨炎、滑膜炎（いずれも疑い）が考えられます。傷害の程度を断定するには関節鏡を入れる必要があります。が、現段階ではあくまで疑いであって関節鏡を入れるのは冒険。そこで、痛みは伴いながらも少しずつ試みていよいよダメなら関節鏡を入れてみようという結論に達し、軽い練習を始めることにしました。

というわけで、野田の活躍は当分期待できません。しかもおまけに、その控えである松田は、先の地区新人戦では疲労骨折のため休養中にもかかわらず急遽野田の代役でぶっつけ本番の出場。そして現在も休養中。さらにバックアップトリオの飯笹・山口・田中のうち、飯笹は地区新人戦直前の足関節捻挫が治ったばかり。山口は地区新人戦後疲労骨折でしばらく休養。キャプテン高橋は地区新人戦後体調を崩して現在調整中。そんなこんなでチームとしての練習はできず、もっぱら個人の手直しが中心という状態が続いています。

こんなことは嘆いていても仕方がないので、気長にこつこつ個人を育て上げ、来期への基礎固めをしておこうと思います。そついつつわけで県新人戦は大きな戦渦は期待できません。朗報はしばらくお待ちください。

【結果報告】

- 一人と三人に感謝のことばを述べます。
- 一人は田中校長です。

田中校長は試合前のアップの時に会場に見えられ、私と一言三言話したあと二回の観覧席に上がられまし

た。そしてアップをする選手の一挙一動から目を離さずじっと見守っておられました。「この子たちのどこに、どんなすばらしさがあるのか」それを決して見逃すまいとするかのように。

普通、会場を訪れた校長はほとんど、ステージに陣取っているお偉方と社交の挨拶を交わし、試合が始まってからコートに目を注ぐというのが通例です。でも田中校長はそうではありませんでした。このような校長にじっと見守って貰える選手たちは本当に幸せです。校長先生ありがとうございました。

三人とは、飯笹・山口・田中の三人です。

現在の本当のスタメンは高橋・野田・高島・成井・宮原です。しかしこの一ヶ月いろいろあつて、今回の試合は三城・飯笹・田中・山口・成井のスタメンで戦いました。しかも、これまで遠征となると留守部隊で学校に残る方が多く、練習ではスタメンの練習相手のちょい役でしか使われたことこの三人は、約二週間で間に合わせたスタメンです。

私は、「今回は準決勝進出でヨシとしよう。もし準決勝に進出できたとしても、長商のゾーンプレスには粉砕されるだろう」と密かに思っていました。しかし、あにはからんや、乱れたのはほんの二分だけ、あとは本当によく踏ん張ってくれました。これで高橋以下、自分の重責に苦しんでいた他の選手たちを安心させられます。バン（飯笹）・リバ（山口）・アサ（田中）ほんとうにありがとう。

【非公開のボックススコア用コメント】

嘆くことも卑屈になることもないよ。試合を観ていた専門家たちは、後半一〇分から九分にかけてのほんの二分ぐらいの間のプレスオフエンスのドタバタ劇を見て、「なんであんなに慌てるんですかねえ」などと批評するだろう。でもね、日頃レギュラーの相手役ばかりさせられているバン・リバ・アサに、「落ち着け！」と言つても無理。それより、四〇分の中でわずか二分しかパニックに陥らなかったことを誉めてやるべきだろう。それに、俺は試合前にラック（高橋）がみんなを集めてプレスオフエンスの要領を確認していたのを見て、「何を話したの？」「フーン」と軽く問い直したけど実はすごく感激していたんだよ。だって、これまでラックにそんなことが一度でもあつたかい？俺はこれをラックが自立し始めた証だと見るね。

【高橋彩】

キャプテン高橋は体調を崩して休養中と書いたが、実は辞めて田舎の阿蘇に帰ると言つて練習を拒絶していたのである。両親が来て鶴鳴で部活動をやり続けるよう説得したが本人はウンと言わなかった。はつきりした答えが出ないまま私は親を帰した。その後長崎に取り残された本人は、登校拒否にはならず、寮から学校には出てくるが練習には出てこない。私は何をしたらかという何の話もせず放課後彼女と肩を並べてグラウンドを走つただけである。昭和五九年に小野が辞めたいと言つた時も同じ事をやった。高橋はバスケットが嫌いになつたわけではなく、照れ屋で臆病で、あいさつも蚊の鳴くような声しか出せなかった彼女にとつて、鶴鳴のキャプテンという重責は重すぎたのである。

やがて練習に出てきた彼女は落ち着きを取り戻し、一部リーグではあるが実業団からオファーがあり、高校卒業後もバスケットを続けることになった。高橋の様な事例は数え上げればキリがない。特に私の選手育成方法は、一旦選手をどん底まで落とし込んでから這い上がらせるやり方なのでこんなことがよくある。

平成十一年一月 九州春季選手権二次予選 三位 スタメン 高橋 飯笹 山口 田中 宮原

【案内文書】

スタメンは前述のとおりです。本来のスタメンは高橋 野田 成井 高島 宮原 にしたいのですが故障者が完治していません。高橋の腓骨疲労骨折、松田の肩関節脱臼、山口の腓骨疲労骨折、宮原の踝痛はハードメニューを除いて練習に参加できるようになりました。三城の足底筋膜炎と成井のリスフラン関節捻挫はまだ練習参加は無理です。それに加えて、新年二日の練習で高島が前十字靭帯を切りました。おそらく今期一年間の戦列参加は無理でしょう。

という状態で一九九九年が始まりました。健康なのは本田・飯笹・田中の三人だけ。それに高橋・山口・

(浜崎か松田)・宮原をつなぎながら、新年二日から七日まで、宇部女子・九州女子・鹿児島女子・神村学園と本校の五チームで強化合宿をしました。不思議なものでこれだけのメンバーでも結構試合になるし合宿が成立するのです。やっぱり、腐っても鯛の精神なのでしょうかねえ。このチームを見てみると、苦しくてもあきらめず、なんとかしようとする努力が続けていればどんな選手でもそれなりの格好がつくものだなあとつくづく思います。

【結果報告】

高島は九日に関節鏡検査をし、そのまま現在入院中です。結果は前十字靭帯の一部がわずかに繋がっているもののほぼ完全に近い断裂。外側半月板は完全断裂でした。鏡視下で半月板を全部摘出し、前十字靭帯は保存療法(CPM)で修復させるを試みます。三ヶ月後再び関節鏡検査をし、その後リハビリの方針を決めます。一年は辛抱しなければなりませんが必要全国大会のコートに立たせてみせます。野田は二〇日に関節鏡検査をします。結果は次回お知らせいたします。

ところで私も二日にMRI検査をします。昨夏に傷めたのがどうもよくないようです。ひょっとしたら鏡視下手術になるかもしれません。それも次回報告します。

さて、試合の報告をします。決勝リーグの一発目は本命純心。逆転・再逆転・再々逆転・再々逆転で負けました。本当にもつたいない負け方でした。でも、常に脇役でしか舞台上に立てなかつた選手に大舞台で主役を与えてもいざとなつたら震えてしまいます。それを責めることはできません。むしろ、よくあの緊張状態に耐えたと誉めてやるべきだと思います。

翌日の長崎商業戦は、前日の純心戦で本田・飯笹・田中・宮原の集中力が限界に達していると思つたので、この選手たちを安心させるためと、もう一度勇気を奮い立たせるための両方の意味から野田と成井をつぎ込むことにしました。野田は約三ヶ月、成井は約二ヶ月何もしていません。もちろん無茶は承知です。でも、前日のメンバーだけで長崎商業と戦つても途中で集中力がなくなるのは目に見えています。そうなれば結果は悲惨です。いくらチームが本来の姿でないとはいえ、公式戦で惨めな敗北を味わわせてはいけません。だから、カンフル剤として野田と成井を投入したわけです。ほんのちよつとのもりが「まだ大丈夫そうだ。まだ大丈夫そうだ」で、かなり長時間になつてしまいました。夜になって電話をかけたなら兩人とも、筋肉痛はあるが患部の痛みは増強していないということだったのでホツとしました。これで平成十一年度のシーズンが終了。あとは三月に足並みを揃えるために調整しながら、前々回の宣言を実行に移していきます。

平成十一年四月 県下春季選手権 優勝 スタメン 高橋 野田 成井 飯笹 田中

【案内文書】

野田の膝は結局、ずっと以前に前十字靭帯の部分断裂があつて、それを放置していたために動く度に膝蓋骨が大腿骨と当たつてすり切れ、軟骨障害に至つたものだとわかりました。現在、周囲の筋力を増強させるためにリハビリとチーム練習参加の半々状態です。

成井のリスフラン関節捻挫は約三ヶ月休んだあと少しずつ練習を始め、今ではどうにかハードメニュー以外はチーム練習に参加できるようになりました。あとは精神面の復活(ケガしたあとはどうしても接触プレイが怖くなります)を待つのみです。

高島は手術後約三ヶ月。近々関節鏡検査を行います。検査結果次第で少しズレはあるでしょうがクリスマスにはウィンターカップでフロアに立てるようにリハビリに励ませるつもりです。

さて新入生ですが、今年は即戦力ばかり。平成三年のインターハイ優勝に次ぐタレントが集まつたと思います。また、壊さないように神経を使って苦労する三年間が続きますが、いくらやつても勝つ見込みのない苦労とは質が違いますからどんなことにも耐えていけると思います。

【結果報告】

従来のスタメンである高橋・飯笹・田中・野田・成井で試合をすると、パッシングやムーヴィ

ングにはクレインズらしさが随所に見られますが成井のシュートに安定性がありません。新入生の花田・永石・村川・重村姉妹で試合をすると、個人個人のシュート力はあるのですがほとんど棒立ちのブレイなので相手のディフェンスが少し厳しくなるとシュートが打てません。決勝戦の後半の永石がそれを象徴しています。これをあと一ヶ月半で動いてシュートが打てる新入生に仕立てなければなりません。

新入生にはもうひとつ急ピッチで仕込まなければならぬ課題があります。それはディフェンスです。通常の新入生なら一年待つのですが、今年はそんな悠長なことはいってられません。ワイン醸造ならともかく、こんな素材を一年寝かせるなんてもつたいないからです。

さてそのディフェンスですがディフェンス力はディフェンスの練習をすれば向上するものではありません。オフENSEの能力はもとも備わった能力に大きく左右されますが、ディフェンスの能力は努力で積み上げるものです。自らの意志で努力を積み上げていくのは人間的に成長しなければできないことです。したがって、ディフェンス能力の向上はそのまま人間的な成長を意味しています。人間的成長の手段として重要なことは「自分はこれでいいのか?」「気付く努力を怠っていないか?」と、常に自己点検をし続けることです。それはとても根気の要る仕事です。

だからそこで上級生の力が必要になります。上に立つ者が下の者に人の道を教える。その方法は今も昔も変わりません。上に立つ者が具体的な行動で見本を示し、下の者を導いていくのです。それが私と上級生に与えられた使命です。もちろん新入生も厳しく自己点検をしなければなりません。自己点検でもっとも大切なのはイヤな自分から目をそらさずしっかりと向き合うことです。イヤな自分を排除できた時、自然に長所は増幅されています。自分の愚かさ気がついた時、成長の第一歩が始まる(山崎語録い)のです。これが、高校生になって初めての公式戦を終えた新入生への私からのメッセージです。

平成十一年五月 岡山遠征

【合宿報告】

平成九年の報告の中にも平成一〇年の報告の中にも岡山遠征のことについて述べているが、鶴鳴は毎年五月のゴールデンウィークを利用して岡山に遠征する。が、この年は行かなかった。というより、長崎を発つてすぐ遠征を中止して長崎に引き返した。

遠征はいつも、私が運転するマイクロバスで出かける。今回の遠征ではそのマイクロバスのエンジンのヒートゲージの針が大村を過ぎたあたりから真ん中よりも上を指すようになり、東彼杵から俵坂トンネルまでの間の上り坂では真ん中とレッドゾーンの間まで上がってきた。

鶴鳴の遠征は北海道と沖縄以外はすべてマイクロバスで行く。選手を乗せていくから運転をする自分自身のコンディションにはもちろん、バスのコンディションにも細心の注意を払う。これまで一度も使ったことはないが、任意保険は対人・対物・搭乗者ともに最高の保障を掛けている。そして、遠征前にはタイヤとブレーキは特に念入りにチェックするし、エンジンオイルとラジエターの水も必ずチェックする。

今回もそれはチェックしたがヒートゲージが上がり始めたのだ。エンジンオイルも充分だったしラジエター水もちゃんと上まで入っていたが、ラジエター水の循環が悪いのかもしれない。岡山までは六時間以上の長距離運転になるので早めにチェックしたほうがよいと思い、私は俵坂トンネルの次の不動産トンネルを過ぎてすぐの非常駐車帯にバスを止め、ラジエターを点検することにした。この非常駐車帯はガードレールのすぐ外が嬉野町のはずれの農道に接しており、その農道を少し下がると小川が流れているので、もしラジエターの水が少なくなっているのならそこで汲んで補充するつもりだった。

でもそれにはエンジンを止めてから時間をおいてエンジンの温度が下がるまで待たなければならない。私は選手たちをバスから降ろしてガードレールの外の農道に出して時間を潰しながらエンジンが冷えるのを待った。一時間ぐらい経ったのかそれ以上経ったのかは覚えていないが、再びバスの運転席に座ってエンジンスイッチをONにしてみたがヒートゲージの針は左端のブルーゾーンではなかったが中央よりも左側で止ま

ったので安全だと思い、運転席の横にあるエンジンルームの蓋を開けてラジエターを点検し始めた。

マイクロバスにはボンネットがなく、エンジンルームは運転席と助手席の間の真下にあるので、エンジンを点検する場合はエンジンルームをまたいで点検しなければならない。私はエンジンルームをまたいでラジエターキャップを用心しながらゆるめ始めたが、少しゆるめたところでシューツという音が出始めたのでヤバイ!と思うとその場を急いで離れようとした。

その時足が滑った。足が滑ったと同時にラジエターの蓋が飛んで水蒸気が吹き上げ、私は吹き上げる水蒸気の上に仰向けに寝た状態になった。私は起きあがろうとせず仰向けのままエンジンルームの端を蹴り、水泳の背泳ぎ状態でエンジンルームの上から後部座席の方に脱出した。私が脱出したあと二、三秒くらいはイローストーン公園の間欠泉のようにラジエター口から水蒸気が噴き上がり、バスの天井を茶色に染めた。

私は急いでバスから下り、外に居た選手たちに「お茶でもなんでもいいから俺の身体に水をかける!」と言った。言いながら急いでトレパンを脱いだ。その時尻・ふともも・ふくらはぎの皮がべろっと剥けた。自分が持っていた飲み物を私にかける選手以外は下の小川まで走って近くの農家のおじさんに事情を話し、バケツを借りて小川の水を汲んできた。

選手たちの慌てぶりを見て心配したそのおじさんは軽トラックでバスの横まで乗り付け、「病院に行きましよう」と言ってくれた。私は同僚の三根氏に携帯電話で事情を話し、現場まで迎えに来てくれるよう頼んで、選手たちにそれを説明してからおじさんの軽トラックに乗せて貰って嬉野市内の大きな病院に運んでもらった。マネージャーのマイちゃんを連絡係として連れて行った。

病院に着いて診察室に入る前に、医師が待合室まで来て私の状態を診て「ウワーひどい!」と言った。付き添いで来たマネージャーのマイちゃんが震えていた。処置室に入って処置をしながら医師が「長崎に戻ったら大きな病院に行きなさい。今晚熱が出たら危ないですよ」と言う。私は少し腹が立ったので不機嫌な声で「わかってます」と言った。だいたい、医師が患者の状態を見て「ウワーひどい」と言うなど言語道断。それだけでなくも患者というのは不安なのにそれを煽るような言動をするなどもつてのほかだ!。

電話で連絡しておいた三根氏がもう一人の運転手を乗せた乗用車で現場に駆けつけてくれたのは、応急処置を終えて私がバスに戻ってから間もなくだった。その頃にはもうバスのエンジンは冷えていて、小川の水をラジエターに補充してキャップも閉めたのでバスを動かすのは問題なかった。三根氏が私の代わりに運転して、嬉野インターでUターンして長崎に戻った。バスの中で私は長崎に着くまで椅子には座らず立ったままだった。尻の皮が剥けているので座れないのだ。

帰途、私は携帯電話で倉敷翠松高校の中野先生に状況を説明し、今回の遠征には行けないことを伝えた。するとしばらくして福井の中池先生から電話がかかってきた。福井商業もこの合宿には毎年参加しているのだ。「ごつしたんですか」「ラジエターの蒸気をモロにかぶっちゃったよ」「それで?」「うん、尻からはふくらはぎまで皮がずる剥けた。カチカチ山のタヌキだよ」「エーッ!」「今夜がヤマ。今夜熱が出たらやばいな」「...」

長崎に戻ったらすぐ、私は身の回りのものをまとめてスクーターに立ち乗りして市内の十善会病院の救急外来に行った。あとで知ったのだが、長崎の形成外科でしかもやけどの治療では右に出る者がいない名医がいるのがこの十善会病院だったそうだ。運がよかった。

治療はその日当直当番の若い医師がやってくれた。嬉野の病院とは違い、若いが実に堂々としており、てきばぎと処置をしてくれる。肌色のシールをペタペタとピンセットで貼り付けていく。「なんですかさそれは?」と私は聞いた。「ええ、豚の皮から作ったシールなんですよ」と医師は言う。私はやけどで皮が剥けたあとの治療は薬を付けたガーゼを絆創膏でおさえて貼る治療しか知らなかったが、それだとガーゼを付け替える時にとても痛い。しかし、このブタの皮から作ったヤツは付けたまま傷が乾くまで治療の度に剥がす必要がないのだそうだ。私は医学の進歩ってすごいなあと思った。

当直の医師は治療が終わったあとインターフォンで病室のことをナースステーションに連絡している。私

は「え？私入院ですか？」と聞いたら「当然ですよ」と医師は言う。あなたは帰るつもりだったんですか？とその顔には書いてある。「え、ちょっと待ってください。それならスクーターを道端に置いてきたので駐車場に移動させなければなりません」「エーッ、スクーターでここまで来たんですか？」「ええ、シートに座れないので立ち乗りでここまで来ました」「……」というわけで入院となった。

翌日からの診察は前述の名医の鶴田先生だった。数日経ってから私は鶴田先生に聞いた。「先生、皮膚移植をしなければならぬ箇所がありますか？」「うーん、そうですね。もうしばらく経ってから調べましょう」「その後数日経ってから鶴田先生は「調べてみましょうかね」と言って皮が剥けていけばひどくただれているところを針でチクチク刺す。「痛いですか？」「痛いですよ」「あ、それなら大丈夫。皮膚移植はしないでいいですね。あとで説明してもらったが、痛みが感じられなかったら神経の末端がやられているということ、神経の末端がやられていたらその部分の皮膚は再生しないので移植しなければならないのだそうだ。また勉強になった。

それにしても、やけどが痛いというよりもうつぶせのまま数週間寝るといのが耐えられなかった。だから入院中の後半はベッド脇の床に膝立ち姿勢となり、上半身だけベッドにうつぶせになって寝るスタイルを身につけた。

追伸 このバスはこの事件のあとすぐ知人に無料で譲り、私は北九州三菱ふそうまで次の中古マイクロバスを買いに行った。それも平成十七年に他人に譲り、私は遂に新車のマイクロバスを買った。最初に無料で譲ったマイクロバスはちよこちよこ修理を重ねながらも平成二五年七月現在元気に走り続けている。

平成十一年六月 県高校総体 優勝 スタメン 高橋 野田 成井 永石 重村妹

【案内文書】

五月十六〜二十一日。SHINKO INN NAGASAKI。

平成九年三月十四日にアメリカのエバンズビル大学に留学するため渡米してから一度も日本の土を踏んでいない大野慎子が二年ぶりに故郷に帰ってきました。慎子はアメリカを発つ前にコーチのところに挨拶に行きました。その時二つの条件を付けられました。

里心がついてアメリカに戻りたくないなんて言いそうだったら行かせないわよ大丈夫？

それが大丈夫だったら行かせるけど、鶴鳴の新生と一対一をやって将来性を調べてきなさい。

キャシー・ベネットは慎子のような選手がいたらまたスカウトしようと思っているのです。慎子が長崎入りした日は四ヶ月遅れの成人式だったので時間が取れず一対一はおあずけ。翌十七日によく時間が取れて一対一をやってもらいました。相手は村川・花田・永石・重村姉妹です。初日の勝負は五分五分でした。それは、帰国直前の慎子は約一ヶ月間毎晩深夜まで学年末テストの勉強でトレーニングをする暇がなく、身体の調整ができていなかったからです。しかし次の日の慎子は別人のようでした。ほとんどの選手が手も足も出ません。ただ、その中で村川だけはなんとか勝負になる場面が時々ありました。

一対一が終わったあとの慎子の感想は「すごいですね新生は」でした。でも、スクリメージを見ながらの感想は「今日のスクリメージは新生側のチームは勝てませんね」でした。スクリメージの組み分けは、成井・村川・花田・永石・重村妹 対 高橋・飯笹・田中・本田・重村姉 です。慎子は成井たちのチームをそう評したのです。理由は「ポーツとしている時間が多すぎますよ」です。

ブレイは身体的素質对身体的素質で決着がつく場合があります。が、試合は人間対人間で決着がつかず。慎子の指摘は当たっています。四月の春季選手権の時もそうでした。前半は下級生の身体的素質が相手を抑えつけ、後半は下級生の精神的な資質につけ込まれて逆転され、最後に上級生がその後始末をして辛うじて再逆転での勝利を収めました。そんなことなら最初から上級生で戦っていたらもっと楽に勝てたのではないかと思う人もいるかもしれませんが、そこが勝負の難しいところでそう簡単にはいきません。

五月の連休明け、膝の鏡視下手術を受けて退院したあと、久しぶりにコートに立った私は選手たちを集め

て「みんな目を閉じる。久しぶりに練習を見たが、こいつうまくなったと思う選手が一人居る。それは私じゃないかと思う者は手を挙げる」と言いました。しかし誰も手を挙げません。帰り際に「お前『私じゃないのかな?』と思わなかったのか?」と聞きました。彼女はコックリしました。成井千夏です。思っているなら勇気をもって手を挙げて欲しかったなあ。

【結果報告】

二〇年くらい前までは公式戦前になると必ず食欲がまったくなくなり、決まって神経性の下痢をしていました。その、忘れていた神経性下痢が今回復活しました。絶対勝たなければならぬ試合なのに、チームとしても選手個人としても課題未解決のままの大会を迎えなければならなかったのがその原因です。決勝戦前夜はいくら考えてもスタメンが決まらないし、いくら考えても試合の様相がイメージできませんでした。

四月の春季選手権と同じで、従来のスタメンである高橋・飯笹・田中・野田・成井 だとパッシングとムービングの問題はありませんが、得点力がガタ落ちします。一方、新入生の村川・花田・永石・重村姉妹でいけば得点力はあるのですがイーゾーミスが大事な場面で頻発します。それで、大会前は両者のいいところをとって高橋・野田・成井・永石・重村姉妹のスタメンを用意していたのですが、大会期間中にその構想が崩れ、決勝直前に重村姉と花田を入れ替えました。とんでもないミスをする花田のトンでもないナイスプレーに賭けてみたかったです。

クレインズバスケットは特殊です。もともと素質のない選手で戦う動きから始まったモーションオフエンスですから、新入生のように能力のある選手たちにそれを強要すると、選手個々に持っている得点能力が埋没してしまい、ただパスをして動き回っているバスケットになる恐れがあります。だから、新入生向きの新しいバスケットを考案しようか、それとも従来のクレインズバスケットをベースに新入生の個性が生きるバスケットを組み立てようかと、いろいろ考えながら結局は確たる方針が定まらないまま高校総体突入となつてしまいました。しかし、その迷いは悲観的な迷いではなく、素材を最高に活かしたいための迷いなので、総体後は楽しみながらこのことに手が付けられます。

試合の展開は春季選手権と同じ様相になりました。下級生が個人的な能力で思い切り暴れて純心と互角の試合をし、下級生の人間的な未熟さがピンチを招き、それを素質のない上級生が訓練の成果を基に後始末して有利に導き、試合をものにしました。上級生だけでは勝てなかったろうし、また下級生だけでも勝てなかったらうと私は思います。両者の合作です。どちらもヒロインです。

野田が、後半五分過ぎに右サイドから華麗なジャンプシュットを決めて着地した瞬間に膝を傷めました。リハビリ中の膝です。私は古傷を傷めたのかと思っていましたけども痛みがりようが違っているので後半はもう出さずに試合が終わった後すぐ長崎に帰り、専門医に診て貰いました。すると見事に膝蓋骨の下三分の一のところにくさび状にヒビが入っていました。野田はものすごくジャンプ力があります。だから、ジャンプシュットを打った際に大腿四頭筋の強烈な牽引力に膝蓋骨が負けて裂けてしまったのです。この試合の勝利の女神は、野田のこのシュートによって鶴鳴に微笑んだといってもいいくらいの価値があるシュートでした。しかし、勝利を呼び込んだ本人はこれでインターハイには出られません。

平成十一年六月 九州高校総体 二回戦敗退 スタメン 村川 花田 永石 重村妹 重村姉

【案内文書】

県高校総体が終わってから一〇日で九州大会ですから九州大会のために何かに的を絞って強化する時間はありません。県高校総体では、選手一人ひとりの、毎日指摘されている精神身体両面の脆さがもの見事に浮き彫りにされました。選手たちが九州大会で県高校総体よりもいい試合をしてくれるためには、それぞれが浮き彫りにされた事実をより一層意識して試合に臨んでくれる以外に方法はないでしょう。

中でも、成井・花田・永石の意識の度合いは今年のクレインズの浮沈を大きく左右します。他の選手は、「とりあえず間に合っているからそれで行こう」か「当分時間がかかるから今は手をつけないでおこう」のどち

らかです。欲を出せば重村姉妹と村川も急いで改善したい箇所があるのですが、六兎を追って三兎を逃がしたくはないのでがまんしておきます。特に村川が早く目覚めてくれれば助かるのですが、眠ったままの獅子になる可能性もあります。気になります。

さて、前述の三人について分析してみましよう。

成井千夏 総体決勝戦は、出場時間のほとんどを恐怖心と緊張を払いのけることができないうまま終わった。

花田有衣 県春季選手権では、すぐカットとなって状況判断ができなくなる性質が出っばなしたが、県高校総体はそれが出たり抑え込まれたりだった。

永石春奈 県高校総体では、シュートが入らないとイライラして無理なシュートに持ち込み自らの墓穴を掘ってしまう性質がずいぶん改善された。

【結果報告】

中村学園戦のデータを分析してみます。個人四件。チーム一件。

成井 前半 得点三 後半 得点八

前半シュート本数わずか五本。これは相手の密着マークにイヤイヤをしながらプレイをしたからです。しかし、完全なワンハンドジャンプショットでスリーポイントが打てるまでに筋力アップしたのも見逃せません。

永石 前半 得点五 後半 得点七

得点が少ないのは、相手を崩せないままシュートを打ったからです。もっとも、チーム最多の得点を取ったのに「得点が少ない」と言われるのも可愛そうですが、それは他人より優れたものを持っている者の宿命です。甘受しなければなりません。そして、そのような人物は人前で決して悲嘆の涙を流してはいけません。

花田 前半 ターンオーバーなし 後半 ターンオーバーなし

一回戦では制御不能状態でしたが中村学園戦では少し落ち着きを取り戻しました。しかし、落ち着いたプレイと、やればいいのに控えてしまうプレイとをまだ混同しています。

村川 前半 出場時間四分 記録なし 後半 出番なし

重村姉は強い相手にも果敢に挑戦して潰れますが、村川は挑戦するのを途中で放棄して潰れます。それが中村学園戦の「後半出番なし」の理由です。 中でもっとも悔しいのがこの です。

全体 後半残分十五から一〇の五分間と八分から三分の五分間、二回のドラウトがあります。このドラウトはプレイの歯車とカリズムの問題ではありません。理由は文末で述べます。

県高校総体が終わった後、グラウンドで五千メートル走を週五回の割合で取り入れていきます。タイムトライアルではなく、五千メートルを二分三〇秒で走るペースです。ペースと姿勢と呼吸を自分の身体の細胞に覚え込ませるのが目的で、心肺機能を発達させるのはまだ先のことです。四対四モーションも徹底的にやっています。ディフェンスはダミーではなく本気でボールを奪いにいきます。ディフェンスからブレイク セカンドリーブレイク セットオフENSEの練習も加えました。これは目の訓練が目的です。

が、今私がつとも腐心しているのは選手一人ひとりの思いを如何にして引き上げるかということです。思いとは「強くなりたい」とか「うまくやりたい」という気持ちのことです。このチームはこれから下級生が主体となって戦っていかねばならないチームなのですが、下級生はいくらシュートやドリブルが巧くても、いくら足が速くても、思いは甘いのです。やはり、数多くの修羅場を乗り切った三年生には思いという点ではかきません。それを、この夏には三年生並の思いにまで引き上げなければなりません。それが試合中のドラウトを減らす大きな要因となります。

平成十一年八月 インターハイ 二回戦敗退 スタメン 高橋 飯笹 成井 永石 重村妹

【案内文書】

県高校総体の決勝戦。残り三分。三点差を争って激しい攻防の真つ只中。応援に駆けつけた本校生徒の一同が一斉に立ち上がり学園歌を歌い始めたそうです。私は試合のことに夢中で応援団がどこに陣取っていたのかも記憶にありませんし、学園歌の大合唱もまったく記憶にありません。これは大会後に聞いた話です。

もう少し詳しく話しますと、残り五分でシーソーゲームの最後に三年七組の馬島典子を中心とするグループが立ち上がって応援を始めたそうです。そこでみんなが「見えないから座ってよー」と抗議したそうです。しかしそれから二分もしないうちに馬島が校長先生に「校長先生！立ってはいけませんか！」と直訴したそうです。校長先生は「ヨシ、みんな立とう」と言われたそうです。そこで馬島たちが立って学園歌を歌い始めましたそうです。それが次々とみんなに伝わり大合唱となったのだそうです。

この話を聞いた時、私は試合に勝った喜びと同じくらい感動しました。私は本学園に奉職して二三年目になります。その間、大応援団の後押しで勇気を与えて貰った試合がいくつもあります。が、応援に駆けつけた生徒たちが自発的に学園歌を歌い始めたというのは今回が初めてです。校名を変えてから三年目。たぶん、新生長崎女子高校を如何にして活気ある学園にしようかという一人ひとりの熱い思いがこのようなかたちで表れたのだと私は確信します。鶴鳴山の地下のマグマはこのようにエネルギーを溜めるだけ溜めて爆発寸前の状態です。私たちはこのエネルギーをそのまま受け継いで一関に乗り込みます。

組合せ表で鶴鳴のすぐとなりは優勝候補の桜花学園です。おそらくクレインズは玉砕でしょう。が、これは平成三年のインターハイ優勝の時と状況がそっくりです。あの時は平成元年の北海道国体一回戦で桜花学園に手玉に取られた試合から出発し、二年後に桜花学園を倒して全国制覇を果たしました。

先月中旬に行われた九州大会では成井のすごいジャンプ力に観衆がどよめきましたが、今度は単発のどよめきではなく、一試合通して観戦した人の感想が「なかなかやるじゃないか」から「年末のウィンターカップは楽しみだなあ」となり「来年はすごいぞ」に変わるようにがんばります。

【結果報告】

試合内容は予想通り手玉に取られたという結果に終わりました。が、私は「そいつはジャンプ力があるから気をつける」と、桜花学園の井上監督が選手に注意をうながしたのを聞き逃しませんでした。案内文書でも述べましたが、全国の頂点に君臨する大監督から、補欠で戦っても勝てるような相手の選手に対してこのようなことばを出させたのは収穫とみなしてよいと思います。試合内容についてはこれくらいしかコメントがないのであとは番外編を報告します。

大会会場は岩手県一関市です。そこに乗り込む前に私たちは七月二十八日と二十九日の両日千葉県柏市のジャパンエナジーで合宿させてもらい、三〇日は茨城県伊奈町の体育館で練習させてもらってそのままホームステイ。翌三一日に一関に向かいました

そのホームステイのことについて少し説明します。第一章で述べましたが茨城から初めて選手が鶴鳴に来たのは平成四年入学の工藤洋子です。その後平成五年に武藤陽子、平成六年に工藤雅子・大滝まゆみ、平成一〇年に成井千夏・高島淳子とたて続けに選手が来ています。なので、ジャパンエナジーで練習させてもらったあとは茨城で一泊ホームステイをさせてもらおうと思っただけです。ジャパンエナジーで合宿したあとの行程は、常磐道から東北道を通って一関に入るし、茨城はその途中なので立ち寄って休息を取るのに丁度都合よく、茨城県の伊奈町の体育館で練習させてもらったあとはホームステイをさせたわけです。これは、めったに里帰りができない茨城の選手たちだけでなく、現役家族も卒業生家族も大喜びでした。

大会会場は一関市でしたが、私たちの宿舎は厳美町の矢びつ温泉璃泉閣というところでした。厳美町は北上川の上流で枝分かれした磐井川中流にある厳美渓という景勝地から約一〇kmさかのぼったところです。ちなみに、一関市から厳美渓までは約六kmです。この宿舎に割り当てられたのははすべて自家用マイクロバスで乗り込んできたチームでした。しかも、選手たちはチーム毎に大部屋を割り当てられましたが私たち監督は相部屋でした。相部屋になったのは、鳥取倉吉北の遠藤監督、山口三田尻女子高校の田辺監督と渡辺コーチです。このように、地方での開催になると監督が相部屋になることがあります。どちらの監督にとっても

相部屋はイヤです。構想を練ったり事務的作業をするために集中したいのですが、同じ部屋に他人がいるとそれができません。

でも、この時の相部屋は実に楽しく過ごせました。発端はマイクロバスのエアコン修理でした。監督同士互いに、どのようなルートで一関まで来たかということを通じて話をしている時、倉吉北の遠藤先生が「途中でエアコンが効かなくなって大変でした」と言いました。それに対して私が「それ、私が治しましょうか」と言ったのです。一介の高校バス監督がマイクロバスのエアコンを修理できるなんて誰も思いません。「え！できるんですか先生」とみんな半信半疑。でも私には見当がついてました。過去の事例から、マイクロバスの室内後部天井裏にあるフィルターの目詰まりでエアコンが効かなくなることがよくあるんです。こんな車の項目には入っていませんから、自分でチェックしなければなりません。車検項目にはなくても、エアコンのガスが減っているとか、ベルトがゆるんでいるのは整備会社サービスでやってくれることがあります。ですが、フィルター掃除なんかやってはくれません。

案の定フィルターの目詰まりでした。その話を聞いて松江商業の目次監督が「うちも同じなんですけど診て貰えますか」というので診たらやはり同じでした。それで徳島城北の富田監督が「うちもうちも」と言ってきたのですが、これはコンデンサーの故障だったので修理しなければ治りませんでした。

そんなわけで、「山崎先生すこい！」で話題が盛り上がり、同部屋の監督同士ではなく同じ宿舎に泊まっている監督とは仲良くなり、バスケットの話もいろいろ飛び出して楽しくすごすことができました。

平成十一年九月 ウィンターカップ予選 二位 スタメン 高橋 成井 永石 重村姉 村川

【案内文書】

最初に、下級生の個々の評価と、インターハイ後のアメリカ遠征のことについて述べます。

成井 彼女のジャンプショットとリバウンドとブロックショットに対抗できるアメリカの高校生はいませんでした。あとは本人の意識がどの程度まで高まるかです。

高島 アメリカでは毎試合少しずつだけ出場させました。でも、無理をすると膝に水が溜まるのでまだりハビリ目的以上のことはさせられません。

野田 骨折線がまだ少し残っています。たぶん今回の出場は無理でしょう。

宮原 体力がスポーツ選手と言える領域まで達していません。それでは重要な試合に使うのは無理です。

村川 攻撃に積極性が出てきました。これはチームにとって大きな問題です。彼女は玉名市出身です。それで、玉名市→ロスアンゼルス市交流事業のためにウイスコンシンから引き続きロスアンゼルスに向かい、帰国は八月二十八日になります。ひとまわり大きくなって帰ってくることを期待します。

花田 キャシーベネットから「慎子の次は彼女は彼女はどうですか？」と勧誘されましたが、彼女はテクニクは長身選手のわりには高度なものを持っていますが、自己制御できない性質が治らなければその素質は何も活かされません。現段階では無理です。

永石 シュートが好調だと大活躍しますがシュートが不調だと精神面まで崩れてポロポロになります。だから貢献度が測定できません。早く自覚してほしいです。

重村姉パワフルな攻撃力で相手にダメージを与えますが、「今こつやるのがこの場面ではベストだ」ではなく、「私は今こつしたい」が優先されるので時々チームの足を引っ張ることがあります。

重村妹全ての役をこなします。でも「エッ？」と思わせる軽率さが相変わらず時々顔を出します。例えばフツーに道を歩いていて穴ぼこに足を突っ込んで捻挫するとか：

今年も前述の下級生の寸評の繰り返しです。それが改善されれば上級生の高橋・飯笹・田中の負担が軽くなり、改善されないまま試合に臨まなければ上級生の負担が大きくなるでしょう。

クレインズバスケットは今回のアメリカ遠征でも前評判が行き渡っていて注目されました。しかしそれは、決して今の現役選手に対しての注目ではなく、過去の先輩が築いてきたものへの注目なのです。下級生がそ

のことを十分に理解し、立派なクレインズバスケットの継承者になることを一人ひとりが自覚しなければ観てくれる人に感動を与えるバスケットはできません。私自身、今回の試合で下級生からその自覚が少しでも感じられることを願ってベンチに入ります。

【結果報告】

「...」

【無言】

五〇年のコーチ生活の中でこのようにコメントが行だけとか無言というのが数回ある。平成二五年四月の県春季選手権準決勝の終わり方、平成二四年十一月の地区新人戦決勝戦の終わり方、平成二〇年八月のインターハイ二回戦の終わり方、そしてこの大会の決勝戦の終わり方は生涯忘れることができない。何度思い出しても怒りが込み上げてくる。

平成十一年一〇月 本国体 二回戦敗退 スタメン 高橋(鶴) 宮本(純) 平田(純) 古閑(純) 永石(鶴)

【案内文書】

一回戦は不戦勝で二回戦は石川。津幡が主体のチームです。津幡はインターハイの二回戦で第四シードの札幌山の手を下して三回戦へ進みました。私はそれを一部始終見ていました。個人技が多彩なチームです。純心は昨年、高知インターハイでほとんど勝っていた試合を最後にスリーポイントを決められて津幡に負けました。自他の戦力分析をしてみても、私は石川と長崎とは互角とみています。

もし勝てば、次の相手は第一シードの愛知。補強選手が何人かいますがそれは名目だけ。実際の戦力は桜花学園そのものと考えてよいと思います。鶴鳴は今年のインターハイ二回戦で桜花学園に大差で負けました。その鶴鳴に純心の選手を加えたとしても桜花学園の選手層の厚さを崩すのは至難の業でしょう。

長崎少年女子選抜チームは平成三年から平成八年までの六年連続ベスト八から落ちたことはありません。平成三年は浜口・松山のツイントワーを擁する鶴鳴、平成四〇六年は永田を擁する純心、平成七〇八年は風軍団の鶴鳴と、常に母体となるチームが全国上位に食い込む力を持っていたからです。それがここ二三年、純心も鶴鳴も戦力ダウンで平成九年と平成一〇年の二年間は九州を突破することができず、さらに今年は府県対抗の年で出場することができましたが早い回で第一シードに当たってしまうという不運に見舞われました。しかし私は、試合が終わった時に「これからの長崎はまたやっかいな存在になるぞ」と思わせる試合をしようと思ひ、毎日構想を練っています。

今私が描いているイメージは、純心の選手の個人技が相手を崩し、それによって鶴鳴の若手のシュート力が活きるという試合展開です。選手たちにそのイメージがしっかり根付くまでにはもう少し時間が必要ですが、十四日の中間テスト終了を待ってラストスパートをかけます。

これまでに、成年女子の胸を借りてスクリメージをたくさんこなしました。この三連休の間には徳島選抜と強化試合をたくさんやります。出発直前には京都選抜と調整のための練習試合を行います。準備は万全です。がんばります。

【結果報告】

出発直前の京都選抜との練習試合は二日にフルゲームを一本やりました。全員好調で、速攻は出るし、アウトサイドのシュートは入るし、インサイドは強いしで非の打ち所のない試合でした。翌二日は午後三時半から代表者会議があるので昼には出発しなければなりません。それで、午前九時から一試合して京都チームと一緒に出発することにしました。ところが、いいことがあったあとは悪いことが起こるもので、昨日の反動がおみやげ付きで襲ってきました。アウトサイドのシュートが入らないばかりかゴール下のノーマークシュートは落としまくり、パスミスは連発でさんざんでした。結局この日は負けてしまい、重い気分での出発になってしまいました。

私たちは初日不戦勝で試合がありません。初日不戦勝のチームには事務局の世話で練習コートが確保され

ているのですが、それは規定により一時間と決まっているので私はそれをキャンセルし、練習会場を探して二時間しっかり練習しました。内容は走るメニューばかり。昨日の重い気分を払拭させるのが目的です。出発前日のような絶好状態に戻すのは無理としても、重さを抜け出すまでとは思ってあれこれ手を尽くしましたが、少しだけ動きが軽くなつたものの、重さは残つたまま練習終了の時間が来てしまいました。通常ならばもっといじめたかもしれませんが翌日は試合なので無茶はできません。

試合当日はやはり、その問題を引きずつたままの戦いになりました。私が立てた構想は純心の上級生の個人技で相手を崩し、鶴鳴の下級生のシュート力を引き出し試合展開だったので、重くてキレのない動きで相手を振り切れません。だからパスが回らずドリブルの多い試合になってシュートチャンスが生まれません。それでも残り一分を切つてから逆転し、どっちに転ぶかわからない状態にまで持ち込んだのです。それは、相手がゾーンで来たら鶴鳴、マンツーマンで来たら純心と、それぞれの個性を使い分けたのが功を奏したのですが、それとて重さを軽さに換えることはできませんでした。そんな時は運にも見放されるもので、残り二秒でインターセプトしたボールが審判に当たつてしまい、再び相手ボールになってしまつて万事休す。審判に当たらなかつたらノーマークレイアップという状況でしたが、二秒でシュートできたかというところでも微妙なところです。

振り返ってみれば、このような試合になつたのは絶好調が二五日ではなくて二一日に来てしまったことが最大の原因です。これは誰が悪いというものではありません。私たちも強化には全力を尽くしましたし選手たちも本当に一体となつて戦つてくれました。今年本国体を経験した下級生は六人。エントリーの半分は二年生と一年生です。県内を見渡せばこの六人が中心となつて来年も戦うことになるでしょう。そして来年もビッグセンターのいない戦いになります。ですから来年も動きで勝負するしか手はありません。この六人が肌で感じた体験をもとに来年は九州国体を突破して、天皇杯得点につながるチームとなるよう、今から準備を始めます。

追伸 成井三三分出場で二〇点 永石二四分出場で十五点。